防御不能の戦王

カラムイラス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界的人気ＶＲＭＭＯゲーム。【Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ】。そのゲームの中に存在する国、アルター王国。この国では五人の超級エンブリオに到達した人物が存在すると言われている。討伐ランキング第一位。ジョブ名以外正体不明の【破壊王】。決闘ランキング第一位の【超闘士】無限連鎖のフィガロ。クランランキング第一位。月世の会を纏める【女教皇】扶桑月夜。人呼んで酒池肉林と呼ばれるレイレイ。そして、討伐ランキング第二位。【戦王】カルキ・ライトロット。彼は人呼んでこう呼ばれる。〝防御不能〟と。

この作品は小説家になろうで連載されている【Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ】の二次小説です。なるべく原作遵守で行かせていただくつもりです。追記　あらすじを変更いたしました。

目　次

序章　ログイン初日 ―― 1
1話　レイとの出会い ―― 22
2話　ＰＫ、遭遇 ―― 34
3話　考察 ―― 43
4話　戦王対ＰＫ ―― 52

序章　ログイン初日

二〇四三年、七月十五日。この日、世界に衝撃を与えるＶＲＭＭＯゲーム〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉が発売された。このゲームを初日購入した多くのユーザーがこのゲームにのめり込み、その者達がこのゲームの面白さを伝えた結果、〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉は瞬く間に世界的人気となった。

このゲームの売りをこのゲームの制作者は発売時に四つ提示した。

一つ、五感を完璧に再現する。

二つ、単一サーバーで仮に億人単位でも前プレイヤーが同じ世界で遊戯可能。

三つ、現実性、３ＤＣＧ、２Ｄアニメーションの中からどの視点で世界を見るかを選択できる。

四つ、ゲーム内では現実の三倍の速度で時が進む。

様々な疑念が世界中で飛び交った。しかしそれはすぐに払拭された。その世界は売りとして提示された物道理だったのだ。

発売日の翌日。制作元のメーカーからこのゲームのプレゼンが世界中に向け、配信された。

『〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉ゲームシステムにはある特徴が有ります』

『数千を超えるジョブの組み合わせやスキル構成によりなお明確なオンリーワン』

『真の意味で無限の可能性とオンリーワンを提供する物　〈エンブリオ〉です』

『〈エンブリオ〉は皆様のパーソナルに応じ、無限のパターンに進化いたします』

『色違いやパーツ違いでは無く、固有スキルも含めて真の意味で無限のパターンに』

『これこそが〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉なのです』

プレゼンターは最後にこう伝えてプレゼンを終えた。

『そう、〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉は新世界とあな

たの可能性提供いたします』
その言葉をもってしてこのゲームは世界的人気作へと登り詰めた。

□アルター王国王都アルテラ　カルキ・ライトロット
「これは本当にゲームなのか」
王都にある噴水近くの長椅子に腰掛けている俺、カルキ・ライトロット。本名は加藤輝騎。年齢は二十五で職業はウェブデザイナー。そこそこ稼ぎもある。そんな俺がなぜこのゲームをやっているのか。発端は東京でマンションを三つも持つ勝ち組の幼なじみからの一本の電話から始まった。
『久しぶりだな、輝騎。お前、どうせ暇だろ？　だったら今からいうゲームを急いで買いに行け』
あいつはこのゲームの名前と、早く買わないと売りきれるぞとだけ言うと電話を切った。此方の返事も聞かずにだ。まあ、調度仕事も落ち着いてきていた所だったと思い、気まぐれで買う事にした。そのゲームは昨日発売されたばかりなのに早々に品切れ状態だった。俺は危うく買うことが出来、家に帰るとすぐにゲームをプレイした。
プレイを始めて最初に見た景色は古い書斎の部屋の光景だった。恐れには思わず首を傾げる。そのあとその部屋で管理ＡＩと出会い、三つの内のどの視点でプレイするかとか、この世界での行動為る時のアバター作成やら、エンブリオなどの説明を受けて、最後にどの国から始めるかと聞かれ、このアルター王国を選んだ。理由はなんとなく。正直どこでも良かった。管理ＡＩは俺の適当さに苦笑いをしていたがそんな事に俺は反応を示さなかった。そんな事は昔から自分自身で分かっていたから。管理ＡＩは最後に何か言葉を送られる。すると俺はこの王都に落とされた。落とされてて最初に取った行動は視点確認。俺は落とされていた時からずっと目を賭していたからそれを開く。そして俺は衝撃を受けた。目を開くとそこには異世界情緒溢れる町並みが広がっていた。自分は異世界に飛ばされたんじゃ無いかと思うほどそれは現実的だった。徐ろに近くにあった建

物のガラスに近づき、自分の姿を確認した。そこには自分が制作したアバターの姿が映し出されていた。
顔と身長は現実世界のままだが、髪と瞳の色だけは変えた。髪は紅く、背中に届く程のを無造作に一つの束にまとめてあり、瞳は黄金色がかっている。俺は次に軽く体のあちこちを動かした。現実を変わらぬその動きっぷりに俺はある事を悟り、噴水の近くまで来て今に至る。
「どうするよ、これから。俺は昔からゲームは苦手なんだぞ」
端から見たら人目を気にせずに苦い顔をして項垂れている青年だろう。しかししょうが無いのだ。先程の発言通り、俺は昔からゲームという物が苦手だった。あれだ、コントローラーを操作しながら一緒に体も動いてしまう人種なのだ。それがいつまで経っても直らずに結局すぐに飽きてしまうような人種なのだ。そんな素人の俺にこのゲームはハードルが高すぎたようだ。何せ、現実と変わらない視点でゲームを為るという感覚にはなれなかったから。これをゲームとして遊べるのは視点を現実性にしていない連中と真のゲーマーくらいだろう。俺はそんな事を考えながら息を吐いた。徐ろに俺は左手に埋め込まれている宝石に目を向ける。管理ＡＩが言うにはこれは〈エンブリオ〉の卵であり、自分の可能性その物だという。にわかに信じ堅いが。
『何かお困りのようクマ？』
不意に誰かから声を掛けられた。語尾がおかしいことに気付いていたが思わず顔を声のした方に向けてしまう。その瞬間。今まで苦い表情をしていた俺の顔は余計苦い物になっていた。理由は声を掛けてきたのが・・・
『お困りのようなら、相談にのるクマ！』
クマの着ぐるみを着ている変人だったからだ。俺は何故顔を上げてしまったのか後悔した。語尾がおかしい所で変人なのは分かっていたのに。自分の不用意さには頭が上がらないのだ。
『ん？　どうしたクマ？』
苦い表情のまま固まっている俺に変人は心配の声を掛けてきた。

「あ、いえ。何でも無いんです。ただ、自分は昔からゲームは苦手だった物で。それに視点を現実性にしてしまったので、そのことに戸惑ってしまって」
目の前の変人に言葉を返すと、彼は不思議そうに首を傾げた。
『ゲームが苦手なら、何故このゲームをやっているクマ？』
「東京にいる金持ちの知り合いが押しつけてきたんですよ。電話越しですけどね。其奴は自分がゲームが苦手だと言うことを知っていたんですがね。此方の話を聞かずに電話を切ってしまったので文句は言えませんでした。それでその知り合いが面白いと言うのならと言うことで調度仕事も一段落した所だったので、興味本位でやってみようと思ったんですが。やはり、ゲーム初心者の自分では少しハードルが高かったみたいです」
彼の言葉に愛想笑いを交えて応えた。するとクマが此方を観察為るように徐ろに顔を近づけてきた。俺は何事かと思いながら目だけ反らしてそれを甘んじて受けた。やはり変人はやることが分からない。
『お前、輝騎か？』
突然変人が俺の本名を当ててきた。何故分かるのか怖くなって俺は怯えたように震えている事に気がついた。
「あの？　どちら様でしょうか？　自分と現実世界で面識があったでしょうか？」
震えた声で彼に聞く。すると変人は俺から顔を離して、豪快に笑った。
『この声を聞いても分からないのか？　俺だ。修一だ』
「え？」
彼の口にした言葉が以外過ぎて俺は思わずしばらくの間、固まった。頭の中が混乱ｓたのだ。それを修正する作業で時間を食ってしまった。
『大丈夫か』
目の前の変人。及びこのゲームに誘った張本人。椋鳥修一は心配した様子で此方に声を掛けてくる。その時には俺の中の混乱は解け

ていた。そこで俺はある行動を取った。
「死に晒せ！」
俺のアッパーが修一の顎もとい着ぐるみの顎へと繰り出された。
『おっと！』
修一はそれを軽々とよけ、俺のアッパーは不発に終わった。だがそれでいい。どうせよけられるとわかっていてはなった攻撃だ。
『何するクマ！』
抗議の声が上がったが俺はそれには耳も貸さない。
「うるさい。黙れ。お前には言いたいことがいくつかあるんだ。黙って聞け」
人目を気にせず、俺は声を大にして言い放った。
「まずは一つだ。お前、自分の用件だけ伝えて電話を切るな。それに俺が何回も電話を掛けなおしても電話に出ないとはどういうつもりだ！」
『そ、それはだな。俺はこのゲームの面白さをお前に伝えたかったんだ。それと電話に出なかったのはお前が文句を言うだろうからと思ってな。文句を聞くならこのゲーム内でと』
その発言を耳にして俺はため息をついた。こいつは俺のことをよくわかっておっしゃる。もうこれ以上何も言わないだろうな。
「次の質問だ。なんで俺を誘った？　俺がゲーム苦手なのは知っていたよな？」
先程とは違い、落ち着いた声で次の質問をする。すると、修一はため息をついた。
『お前はそうやって何かと諦めているところがあるからな。気付いているだろ？　これがただのゲームじゃないってことぐらいは』
俺はその言葉に渋々うなずく。
『それが理由だ。お前視点を現実性にしただろ？　だったら体を動かすことが好きなお前ならはまると思ってな』
着ぐるみで見えないが、修一のが笑っていることが伝わる。俺は徐に額に手を当てる。
「全く、お前は俺を乗せるのが上手いよ」

俺は最後に呆れた声でそう言い放つ。

□王都アルテラ郊外　カルキ・ライトロット

俺はとりあえず、修一と共にクエストを受けることにした。俺は初心者だからそのぶん修一に一から教えてもらうと考えた。そのため王都郊外に出ていた。傍から見たら俺はクマの着ぐるみと共にいる変人という扱いになるだろう。

「なあ、修一。なんで着ぐるみ来ているんだ」

『ゲーム内で本名で呼ぶなクマ。今のクマの名前はシュウ・スターリングクマ』

確かに本名で呼ぶのはゲーム内ではルール違反なのかもしれないな。

「にしても安直だな。もっと考えろよ」

『そういうお前はどういう名前にしたクマ？』

「カルキだ。カルキ・ライトロット」

俺がつまらなそうに自分の設定した名前を口にした。すると横で歩いていたシュウは噴き出すように笑い声を溢す。

「笑うほど酷いか？」

少し、落ち込む。するとシュウは笑い声交じりに言葉を返してきた。

『カルキも人の事言えないクマ。その名前、お前が昔流行らせようとして全く流行らなかったあだ名クマ』

「言ってろ」

詰まらなそうに眼を背けながら俺は『先ほどの質問を繰り出す。

「そんなことより、なんでお前は着ぐるみ姿なんだ？」

『話すと長くなるクマ』

「一行で纏めろ」

遠くを見ながら黄昏るシュウにしびれを切らし、俺は切り捨てるように言い放つ。

『アバター制作に失敗した』

「ざまぁ！」
　笑ってやった。それはもう思いっきり。幸い周りに人がいるところではなかった為、おれの声を聴いているのはシュウ一人だけ。
『そんなに笑わなくてもいいと思うクマ』
「さっきの仕返しだ。甘んじて受けろ」
　シュウはおもむろに肩を落とす。
「で、受けたクエストってどういう内容なんだ？」
　笑い交じりの声でその内容を聞いた。
『受けたクエストは子供を誘拐して売買している盗賊の撲滅と子供たちの保護クマ』
　彼の言葉に俺は顔をしかめる。本当に胸糞悪い。ん？
『どうしたクマ？』
「いや、何でもない」
　自分でも疑問に思う。なんでゲームの世界での人身売買を聞いて自分は胸糞悪くなるんだ？　ゲーム内じゃよくあるクエストの一つじゃないか。
『難易度は三くらいだな。余裕という訳ではないが、役割分担をしよう。俺は囮になって盗賊たちの注意の目を引き付ける。だからその間にお前が子供たちを救え』
「危険度的には俺の方が高い気がするが、まあいい。俺はまだ、自分の可能性とやらが孵化していないからな」
　そっと左手を掲げ、孵化前のエンブリオに目をやる。
『大丈夫クマ。盗賊はみんなクマが処理するクマ』
「見た目と語尾がそんな恰好なのに言ってることはえげつないな」
　やる気のある声で宣言された。俺はシュウに苦笑いを返すしかなかった。
『そういえば、カルキ。もしデスペナルティになった場合のこと』
「説明は受けた。いざとなったらデスペナになって逃げるさ」
『それでも誘拐された子供たちには支障が残るクマ』
　妙に心に刺さることを言ってくるな。
「分かっているよ。お前が盗賊を全員退治してくれたら、俺がデスペ

ナなることもないし、子供たちも無事に保護することができるんだ。だから頼んだぜ」
『本当に分かっているクマ？』
　分かっているよ。いざという時、俺がお前が来るまで生きて子供たちを守らないといけないことくらい。本当に危険な役割だよな。子供たちが誰一人死なないこと。それがお前にとってのハッピーエンドなんだな。全く、付き合いが長いと、お前の言いたいことが嫌でも分かってしまう。そして俺の嫌なこともお前には分かっているんだな。本当にお前は俺を乗せるのが上手い。憎らしいくらいに。

□盗賊アジト前　カルキ・ライトロット
「俺は中に入る。だから援護をしろ」
『了解クマ』
　シュウは自分のエンブリオであるバルドルという重火器をとりだした。それをアジトに向けて数発放った。正直目を疑ったが、今はそれどころではない。すぐに煙が昇っているアジトから十数人の盗賊たちが出てきた。彼らは襲撃犯を探して周りを見回す。シュウは囮となるため、自身の姿を曝そうとする。その前に俺はシュウにだけ聞こえる声で一つだけ言わせてもらった。
「お前ひとりでもよかった気がするよ」
『戯言はいいから早く行け』
　語尾がなくなっている。本気を出すんだな。俺はシュウの邪魔にならないように誰にも見られないように隠れながらそっと、アジトの中に侵入した。
「さて、どこにいるのやら」
　おれは影に隠れるようにアジト内を移動していた。しばらくすると、出口とは違う方向に走っていく数人の盗賊たちが見えた。
「もしかして・・」
　その盗賊たちを隠れながらついていく。すると、鍵が何個もかかった期の扉の前でその盗賊たちが立ち止まった。そいつらは鍵を開け

ていき、中に入っていった。幸いなことに扉は開いたまま。あそこ子供たちが監禁されている場所だと悟った俺は気付かれないように中に入った。

「!!」

中に入って目撃したのは首に首環を付けた子供たちが盗賊たちによって無理やり牢屋から連れ出されている光景だった。大事な商売道具だ。傷つけることはしないのだろう。しかし俺はその光景が許せなかく、すぐに行動を起こした。ひっそりと気付かないように一人の盗賊の後ろまで行くと、おもむろに口と鼻を服の袖と手で覆い、暴れないように両腕を抑えながらこの盗賊の意識を落とした。俺はおもむろに盗賊の服を奪い、それを身に纏う。

「ほら、さっさと出ろ。じゃないと逃げられないだろ?」

「お前もそこに突っ立ってないで手伝え」

残りの盗賊二人が俺を仲間だという認識してくれた。正直助かったし、やりやすい。

「はい、すいません」

謝りながらおれは彼らに近づき、模擬剣で二人の首を強打した。

「く!」

「かっ!」

一人は意識を失った。当然だ。刃は潰したとはいえ、元が鉄だ。強打したらそれなりの激痛を伴う。

「お、お前。誰だ? 仲間じゃないな」

気絶しなかった方の盗賊が震えた声でそう口にした。しかし答える義理はない。俺はもう一度首を狙っても技研を振るった。しかしガードされる。当然だ。相手の狙う場所がはっきりしていればガードはしやすい。だから同じことはブラフでしかやらない。

「かはっ!」

肺から空気が抜けきった声を盗賊は出した。

「き、さま」

俺が狙っていたのは鳩尾への攻撃だ。これによって、盗賊は崩れるように倒れた。俺はその盗賊から鍵を奪い取ると、先ほど奪った盗賊

の服を一度脱ぎ、子供たちのいる牢屋まで近づいた。彼らは怯えた目でこちらを静かに睨んでくる。
「あなたも盗賊の一人ね」
中にいた女の子が食い掛るよう突っかかってきた。俺は静かにするよう自分の口に指をあてる。
「俺は盗賊じゃない。君たちを助けに来たものだ」
その言葉に子供たちは一瞬呆ける。だけど助けに来たことに安堵して泣き出しそうになる子が出てきた。
「だけど今は静かにしていてくれ。君たちに声をあげられると君たちを助けられない」
泣き出しそうになる子供たちは俺の言葉に従うように口を自分のてで塞いでいた。俺は「いい子だ」といい、おもむろに牢屋のカギを開ける。
「困んじゃよな。勝手なことされると」
不意に扉の方から渋い男の声が聞こえた。子供たちの表情を見ると、恐怖に染まっていた。は急いで振り返ると、いつの間にか首を捕まれ、格子に体を押し付けられていた。
「お前が実行犯か。ということは外にいるのは囮じゃの」
声の主は六十を超えるであろう壮年の男であった。顔にはいくつかの皺があり、その深さがこの男の年齢を物語っている。しかしその力は壮年の男ではありえないくらい強いものだ。
「く、かっ！」
どうにかこの拘束を抜け出そうとする。しかし一向に抜け出せる気配がしない。俺はこの男に鋭い目で睨む。しかしそれをあざ笑うかのように男は柔和な笑みを浮かべる。
「なんじゃ。よく見ればいい男じゃの。儂の若いころにそっくりじゃ。勇敢で、無鉄砲で。そして考えなし」
壮年の男はそういうと俺を壁に向けたたきつけるように投げる。俺はその衝撃をもろに受けた。
「それくらいで倒れるような柔なつくりはしていないだろうて。早よう立て」

「お前に言われなくても・・・」
俺は少し震える足を抑えながらどうにかして立ち上がるり、模擬剣を構える。
「ぎゃはははは！」
俺のそんな姿を見た男は一瞬目を見開き、そのあとおかしそうに笑った。
「そんな刃を潰した剣一つで乗り込んできたのか。お前は相当な愚者のようじゃ。面白いぞ」
彼は面白そうに笑ったあと、あることを俺に言ってきた。
「お前、儂の部下にならんか？　わしがお前を鍛えてやる」
結構真剣なトーンの声で男は俺にそう言った。その言葉に俺は呆れたの表情を向けた。
「俺は倫理観を持たないやつの話は聞かないことにしているんだ。それも人を商売品としか見ていない奴や、人の命の価値も知らない奴なんかは特にな。お前はどうやら強いんだろうが、俺はお前には屈しない。ここで命を奪われてもな」
「そうか、残念じゃの」
心底残念そうな表情をした後、男は獰猛な目を俺に向けた。
「なら、お望み通り死んで貰うことになるか」
「そう簡単にはやられないぞ。何たって、もしこうなった時の保険のために時間稼ぎが俺の本当の仕事だからな」
男に向け、俺は駆け出す。男は徐に抜いた刀を俺に向け振るう。
「面白いの。余計ほしくなるわい」
「しっ！」
それ斬撃を寸でで回避する。今度は俺が模擬剣を男に向け、振るった。しかし当たることはなかった。男によって模擬剣を持つ手の手首を抑えられてしまったのだ。
「ぎゃはははは、勝負あったな」
「早々に決めるんじゃねえよ」
俺は本体の左の拳を男の顔面に向け放った。その攻撃は見事成功し、男の鼻を捉えた感触が拳に伝わった。そこで男に抑えられた手首

も解放され、俺は深追いはせずに一旦下がった。
「痛いのじゃが」
「そういう割には随分と軽口だな」
軽口を口にしている時点でダメージはほぼ受けていないだろう。逆にこっちがダメージを負ってしまった。男の顔面を捉えた左手は麻痺という状態になり、ＨＰも少し減った。
「随分と固いんだな」
俺が睨みながらそれを言葉にすると男は愉快そうに笑った。
「ぎゃはははは！そうじゃろう。これのおかげじゃ」
誇らしそうに奴は首のペンダントに手をかけた。
「これはな、儂が討伐した〈ＵＢＭ〉の戦利品だ」
「〈ＵＢＭ〉？」
「なんじゃ、知らんのか。無知な奴じゃ」
男は面倒そうな顔をして、軽く説明した。
「〈ＵＢＭ〉っていうのはだな、恐ろしく強いモンスターじゃ。様々な超常的な能力を持って居る。こいつも元々はそいつが身に着けていたものじゃしな。そしてそのモンスターを倒せば、そのモンスターの能力の一部が宿った戦利品をもらえるんじゃ」
「そうなのか。なら」
再び、俺は男に向け駆け出し、おもむろにそのペンダントに手を伸ばした。
「無駄じゃよ」
しかし奪い取ることは出来ず、男の刀によって体を袈裟きりにされた。幸いというべきののか、ＨＰは半分くらいまでしか減らなかった。
「奪えない時を想定して麻痺している左手を伸ばしてくるとは、あっぱれじゃの」
「褒められてもうれしくはない」
「しかし、せっかちだの。儂は親切にもこれの能力を教えようとしたというのに」
その発言にはさすがに耳を疑った。

「何を企んでいるんだ？」
「何も企んどらんよ。ただ、お前さんが欲しいだけだからのう」
とぼけたように顔を揺らす。
「これの能力はの、儂に異常なまでの耐久値をくれるんじゃ。いくら攻撃しても、その攻撃は儂には通らん。分かったか？　お前さんは儂には勝てないのだよ」
勝ち誇った顔を男は見せたそれが俺をイラつかせる。
「どうじゃ？　儂に勝てないと知って、儂の下につく気になったか？」
「つかねえよ」
俺は模擬剣をまだ麻痺中の左手に持ち替え、男に剣を振るう。
「その攻めは愚策じゃのう」
男は刀を振るうと、俺の模擬剣が破壊された。
「な！」
「持ちこたえた方じゃ。本当に惜しいの」
男はそっと俺の首に刀を据えた。
「それじゃあ、さよならじゃ」
これを喰らったらＨＰは確実にすべて無くなるだろう。俺はデスペナを覚悟した。
「やめて!!!!!」
不意に子供の声が聞こえた。当たり前だ。ここは子供が監禁されていた牢屋なのだから。その方向に目を向けると、牢屋から抜け出した子供たちの姿があった。
「お兄ちゃんを殺すなら、まずは僕を殺してからにしろ」
「そうだ、私から最初に殺せ！」
「そうだ！」
子供たちがそう叫んでいる。
「何をやっているんだ！　逃げろ！」
叫ばずにはいられなかった。何故自分がこうして時間稼ぎをしていると思っている。お前たちを無事に家族の元に帰すというシュウの願うパッピーエンドを迎えるために俺はここまで頑張っているんだ。それなのに何故、自分から命を粗末に扱うような真似をする。

「なんじゃ、お前たち。そんなに死にたいのか？　・・・・ならお望み通り、死んで貰おうかの。もともとそうするつもりだったのじゃからな」
　柔和な笑みを浮かべながら、男は標的を子供たちに変え、刀を振り上げながら段々近づいていく。子供たちはそんな男のことを悪魔に見えるだろう。それでも彼らは逃げない。そんな彼らを見捨てられる俺じゃない。しかし管理ＡＩから渡された模擬剣はない。それでも助けに行くしかない。例え、デスペナになろうとも。一つしかないティアンの子供たちの命を散らせるわけにはいかない。そう思うと、体が勝手に動いていた。
「うおおおお！」
　俺は男が刀を持っている方の腕に飛びついた。
「なんじゃ？」
　突然腕が重くなったことに気が付き、男は怪訝そうな顔で腕をみた。
「お前さん。どういうつもりじゃ？」
　男は不思議そうな顔をしながら言葉を発した。それに俺はごく当たり前の言葉を返す。
「子供を守るのは大人の仕事なんだよ」
「そうか。なら」
　男は反対の腕で俺を引きはがし、壁に叩きつけた。
「そこでそのガキ達が死ぬのを眺めていな」
「黙ってやられるのを見るのは趣味じゃねえんだよ」
　俺は徐に瓦礫の欠片を投げつける。どうにかその行動を阻止しようと。しかし胸のペンダントのせいで全く攻撃が通じない。
「やらせるわけにはいかねえんだよ」
　無垢なる子供の命を奪う行為は。未来を創る子供を殺す行為は。こどもに絶望を与える行為は。子供に死の恐怖を与える行為は絶対にやらせるわけにはいかないんだよ。届けよ。届け！　それ以上そいつらに近づくのは・・・・・
「な、に！」

そこで気が付いた、自分の左手の卵が輝いていることに。その光は俺の思いに呼応するように輝きをまして、ついに〈エンブリオ〉は孵化のの時を迎えた。
「これ以上、あなたの進行は許可できません」
そして新たな声がその場に聞こえた。ヴァイオリンを思わせる清らかな声。声を追うようにその方向に目を向けると、そこには十五そこそこの少女が男の進行を止めるように立っていた。赤と金を基調としたフリルのついたコスプレ用の軍服を思わせる服を身に纏い、膝裏まである金髪を低いところで二つ結んでいる。瞳の色はは蒼穹を思い出させた。肌はアルビノかと思わせるくらいに色白い。そんな一見場違いの思える彼女がいきなりこの場に現れた。それが意味することはただ一つ。あいつが俺の〈エンブリオ〉ということだ。
「なので今すぐに子供たちの前から姿を消しなさい」
彼女は男が振りかざした刀に臆することなく、それを口にした。男は少しの間、呆然と彼女を見たがすぐに口角を上げ、声を上げて笑い出した。
「何が起こったかと思えば、ただ女子が出てきただけじゃったのう。しかもこれが玩具と勘違いしているようじゃ」
男は振り上げた刀を彼女に向け、振るった。子供たちは咄嗟に目をつぶった。男は殺したと確信した。しかし彼女は傷一つ付かなかった。
「な、なぜじゃ!」
その事実に男は狼狽えた。
「答える理由はないと判断しますので。返答は不要かと。それより、後方に注意を向ける事をおすすめします」
俺の〈エンブリオ〉は淡々と律儀に返答と注意を返した。
「全く、俺の〈エンブリオ〉は少しばかりおしゃべりのようだ」
狼狽える男の後ろまで俺は近づく。そのことに気付かなかった彼は驚いたように俺に目を向けた。
「お前、名前はなんていうんだ?」
俺は男のことなど眼中に入れず、彼女に近づく。すると彼女は徐に

自分の胸に手を当てた。
「仰せのままに、我が主君。わたしの名前は〈エンブリオ〉、ＴＹＰＥ：メイデンｗｉｔｈアームズ。【戦域隣妃　ラクシュミー】。以後お見知りおきを」
「そうか。ラクシュミーか。少し長いな」
「なんとでもお呼びください。ですが、その前に。子供の害となるこの獣を駆除することをお勧めします」
　ラクシュミーが男の方を見るように促した。俺はそれに従うように男の方を向いた。男は今までの柔和な笑みなどではなく此方の行為を嘲笑うような表情をしていた。
「はっははは！　面白いぞ。武器もないお前さんらがどうやって儂を倒せるというのじゃ」
　男はそういうと高笑いをしながら、両手に刀を握った。
「武器ならありますとも。今までにが比較にならない程の物が」
「言わなくていい。それより、ｗｉｔｈアームズって事はお前が武器になるか？」
　俺の言葉にラクシュミーは頷く。
「分かった。じゃあ、さっさと倒して、子供達を安全な所まで避難させるか」
「了解であります」
　ラクシュミーはそういうと、姿を武器に変えた。それはガードのところが金の翼を思わせる装飾がなされた赤い刀身をもつ片刃剣だった。俺は徐にそれを手に取った。
「刀相手に片刃剣かよ」
『同意いたします。しかし、今は目の前の獣に集中することをお勧めいたします』
「何をするのかわっからぬが、無駄じゃ。お前さんに儂は切れぬ。儂にこのペンダントがある限りな」
　勝つことを微塵も疑わない顔をしている。むかつくわー。
『主君。あの獣の行った行いや言動で嫌な思いは何回されたでしょう』

突然そんな事を聞かれて耳を疑った。だが、今の状況だからラクシュミーはそれを聞いてきたのだろう。きっと何かあるに違いない。そう考えと俺は少しの間、それを思い出した。
「さあな。ただ、ここだけの事だったら、最低でも五回は言っているだろうな。あいつの言っていることなんて糞だから耳に入れたくもない。それがどうした？」
『それだけ行えば十分です。あの獣にはスキルが適応されますね？』
スキル？　必殺技でも出すのか？
『その認識で合っております。とりあえず剣を振り上げてください』
俺はとりあえず言われた通り剣を振り上げ、剣道でいうところの上段の構えを取った。
『次に獣が近づいてきたら私が言う言葉を叫びながら剣を振り下ろしてください』
「恥ずかしいな」
『そうしないとスキルはうまく作動しませんので。我慢してください』
そうこう言っている間に悪い笑みを浮かべている男が両手の刀を広げながらこちらに駆けてくる。
「その剣。高く売れそうじゃの。お前さんを殺してその剣を売れば儂の余生は安泰じゃ。じゃから貴様はここで死んでゆけ！」
男が俺に向け双刀を振るうと同時に俺も剣を振った。ラクシュミーに言われた言葉を叫びながら。
「〈掲げる刃（マー・ラー）、阻むもの無し（ストラ）〉」
男の双刀と俺の剣が交差する。数秒もしないうちに刀は二つとも折れた。
「な！」
そしてそのまま刃は男の体に振るわれる。しかし男には自分は傷付かないと確信していた。〈ＵＢＭ〉の戦利品であるペンダントの効力で彼の耐久値は異常なまで上がっていたのである。どんな攻撃であれ、彼に攻撃を与えられない。しかし何事にも例外が存在するのは世の常。

「！　な、何故。何故儂が血を流して居る」
　男は驚愕して目を見開き、思わず膝を地に着け自身から血液に目をやり、その次に俺を睨んで来た。
「お前、何をした」
「・・・・・。何もしていない。ただ剣を振るっただけだ」
　この状況は俺でも予想外だった。何故なら正直押し負けると踏んでいたからだ。それなのに俺は押し勝ち、あまつさえ、男の耐久の壁を破ったのだ。混乱しないわけが無い。
『正確には破ったのではありません。剣を透過させ、攻撃を直接体に与えたのです』
　ラクシュミーは淡々と先ほど発動したスキルの説明をはじめた。
『〈掲げる刃、阻むもの無し〉は主君が嫌がるような行いや言動をを行った分、敵対者にＨＰの０、５割を削る防御不能の攻撃を与えるスキルです。この獣が主君を深いにさせた回数は五回以上プラス１。主君、ちなみに発動中でもカウント数は増えます。お気をつけください』
　このスキル怖っ！　なんでこんな物が俺から生れたんだよ。これじゃあ俺、暴君じゃねえか。
「くっ！　まだまだじゃ！」
　男は徐ろに立ち上がり、再び手に刀を握り、俺にそれを振るってくる。
「〈敵攻阻（ヘンダー）む隣妻（シータ）の加護〉」
　ラクシュミーが新たなスキルを独自で発動させた。
「な、なぜじゃ！」
　男が振るっていた刀が突然原型を失うほど壊れた。それには男も狼狽えた。そして俺はその際できた隙を逃さない。再び、男に向け、未だスキルが発動中の片刃剣を振るった。
「ま、待て！　話し合おう！」
　男は俺の放った剣戟で体のバランスを崩して倒れた。すると此方に両手を向け降参のポーズを取りながら俺にそう持ちかけてきた。しかし俺はその言葉を耳に入れていない。入れたらスキル継続時間

が延長しそうだったから。
「残念だが、それは無理だ」
俺は男の言葉を突っぱね、今度は俺が男の首に剣を添えた。
「俺の〈エンブリオ〉が目覚めた以上、お前の選択肢は二つだ。俺に切られる、黙って拘束するか」
どっちを選ぶだろうか。この男は。
「そうか。なら」
男はどこか諦めた様な顔を此方に向けてきた。
「儂は死を選ぼう！」
そういうと男は両手を俺の首目がけて突き出してくる。しかし、それより先に俺が剣を男の体に食い込ませていた。男は突き出していた両手の反動で俯せに倒れた。
「殺しはしねえよ。しばらく眠ってろ」
吐き捨てるようにそう言うと、俺は出入り口の方に顔をやり、耳を澄ませる。外からの戦闘音が聞こえない。つまり、シュウが盗賊達を制圧し終えたと言うことだ。俺は安堵した表情をして、子供達に声を掛ける。
「みんな、今からここを脱出する。その際、前の子の肩を掴んで離れないようにするんだぞ？」
俺はいの一番に出入り口の扉を開け、外に出て、子供達に出るように促す。すると子供達は俺の言ったとおりの行動をして、次々とその部屋から出て来た。
「自分はもう一度この部屋に入るけど、決してそこを動くなよ」
最後の一人が出るのを確認為ると俺は子供達にその場で待機するよう命じて再び中に入った。理由は盗賊達を子供達の入っていた牢屋に盗賊達を収納する為。
「これで最後だ」
その作業はあまり時間も掛からずに終わり、最後に牢屋に鍵を掛けた。俺は一度未だに意識を戻さない盗賊達を見渡し、その場を後にした。子供達はちゃんと言うことを聞いてくれており、誰一人いなくなってなく少し安堵した。

「よし、俺についてこい」
俺は子供達を引き連れ、外に向け、足を進めた。

□元盗賊アジト前　カルキ・ライトロット
外に出てくると、アルター王国の騎士団と言われる人達がいた。子供達はすぐに騎士団の元に駆けていき、そこで俺の役割は終了。な訳は無く、しばらくこの場でいろいろ聞かれた。中で何があったとか、どうやって子供達を助けたとか、そういう事をだ。俺は少し面倒だったが、正直に言った方が後腐れ無いと判断して全てを離した。話の途中で俺が刀を何本も持っている壮年の男を倒したと言ったら、そいつはどこにと言われたので、逃げられないように牢屋に入れてあると答え、鍵も渡した。そうすると、鍵をもった騎士が駆け足で数人を引き連れてその場所に向っていった。そのあと少しの質問をされた後に俺はようやく解放された。俺は貴影となっている木の根元に腰を掛け体重を預けた。
「疲れたぞ。ラクシュミー」
今まで武器状態だった彼女はここで再び姿を現した。彼女は俺のそんな姿を見ると吹き出すように見栄を于かげた。
「お疲れ様です。主君。初めてにしては勇敢だったと思いますよ?」
「なわけないだろ。俺は勇敢っていう言葉が一番似合わない男だ。あえて言うなら泥臭いか?」
「それもかっこいいと思いますけどね」
「言ってろ」
俺はそういうと、徐ろに目を閉じた。寝ている訳じゃない。考えを纏めているのだ。このゲームがどういう物なのか。この世界がどういう物なのか。そして、自分がこの世界をどう思っているのか。そんな事を思考している
『お疲れクマ。お手柄だったクマ』
しばらくそんな事をしていると、シュウが声を掛けてきた。おれはそっと目を開き、シュウに顔を向けた。

『彼女がカルキの〈エンブリオ〉クマ？　変わっているクマ。〈女性型のエンブリオ〉もいるクマね。それも美人クマ』
シュウが珍しそうな物を見る目をラクシュミーに向ける。すると彼女は胸に手をやり、シュウに向けて頭を下げた。
「初めまして、シュウ・スターリング殿。私は主君、カルキ・ライトロットの〈エンブリオ〉。【戦域隣妃　ラクシュミー】と申します。メイデンというＴＹＰＥの〈エンブリオ〉でございます」
以後お見知りおきをと言いながら彼女は笑みをシュウに向けて放った。シュウもシュウで『よろしくクマ』と軽い感じで返した。
「シュウ。お前に言いたいことがある」
不意に俺は彼に声を掛ける。シュウは首を傾げながら『何クマ？』と返した。俺はここで先程まで纏めていた事の答えをシュウに話した。
「このゲームは確かにただのゲームじゃないのかもしれないな。俺はこういう世界感が好きなのかもしれない」
俺は自分の言っていることに笑いそうになった。
「あっちの世界じゃ出来ない事もこっちだとできそうな気がする。このゲームは面白いな」
俺がシュウに向けて気に入った事を伝える。すると彼は着ぐるみ越しに笑った。
『そういうと思ったぞ。だからお前を誘ったんだ』
彼は着ぐるみを着ている状態なのに修一として返してくれた。その事が少し可笑しく、思わず声を上げて笑った。その声はその場だけに響いたが、とても楽しげな物だった。

1話　レイとの出会い

□王都アルテラ〈天上三ツ星亭〉レイ・スターリング

俺は現在自身のジョブを決めるため【適職診断カタログ】とにらめっこしている。

「兄貴、ちょっと聞きたい事があるんだけどさ」

『何クマ？』

クマの着ぐるみを着ている俺の兄貴。シュウ・スターリングは軽い声で返してくれる。

「昨日の話なんだけどさ。戦争に参加した【超級】がいるって言っていたけどさ。その人ってどんな人なのかなって」

あれは昨日の歓迎会の時。兄はがこの世界の事を教えてくれた時の事だ。その時にデンドロ時間で半年前にアルタ―王国と隣国のドライフ皇国が戦争になった事も教えてくれた。その時この国の【超級】は一人を覗いてこの戦争の参加を見送ったということも聞いた。この話を聞いた時からその人物だどんな人物なのかずっと気になっていたのだ。

「それは私も気になっていた。教えてくれるか？」

自分の考えに俺の〈エンブリオ〉であるネメシスも同意してくれた。兄はそんな俺たちに目をくばせ、しばらく思考しているのか間をとった。

『レイはそれを知ってどうするクマ？』

兄のそんな言葉に思わず首を傾ける。

「別に何もしないけどさ。けど気になるじゃん。兄貴が参加しなかったアルター王国とドライフ皇国の戦争に参加した【超級】がどんな人なのか」

嘘偽りない自信の言葉が自然に口に出した。そんな俺の言葉に兄は頷きながら聞いてくれた。

『そうか』

その言葉だけ自声で答えた兄は手に持っていたジョッキをおもむろに置いた。

『お前が言っている戦争に参加した【超級】というのは討伐ランキング第二位の所に名前が載っている奴クマ』
兄は不意に掲示板を見るように促しながら説明を始める。
「討伐ランキング第二位？　えっと、一位は確か【破壊王】だったから、そのすぐ下の・・・・」
兄に促されたままに必死に掲示板に目を凝らす。こういう時、ランキング上位に名前があるとほんとに助かる。
「【戦王】とだけ乗っておるな」
どうやら俺よりネメシスの方が見るのが早かったようだ。確かに【破壊王】のすぐ下には【戦王】と名が記されていた。
「随分と仰々しい名前だの」
手にカップを持つネメシスは名前の仰々しさに顔を歪める。
「王が付くってまさかそれってジョブ名なの？」
『当たりクマ。その【戦王】が【超級】で唯一半年前の戦争に参加したやつクマ』
兄はそれを言うと、ジョッキを口に運んだ。
『他の【超級】はみんな、驚いていたクマ』
「そうなのか？」
ジョッキを飲み干し、テーブルにそれを置くと、兄は話を続ける。
『そうクマ。決闘ランキング第一位の【超闘士】無限連鎖のフィガロは苦い顔をしていたクマ。クランランキング第一位の〈月世の会〉のオーナーである【女教皇（ハイプリエステス）】は目と口を開いて唖然していたクマ』
未だ顔を見たことのない二人がそんな表情をしていたのかと想像してしまう。
『【破壊王】は【戦王】が戦争に参加することを止めたらしいクマ。『お前が出るべきじゃない』と口にして。しかし【戦王】の意志は固かったクマ。『戦争に参加しなかったら、俺のジョブが泣く』　そう言って、あいつは戦争に参加したクマ』
「だが、アルター王国は敗退したぞ？　その【戦王】とやらがおりながらな」
ネメシスは現実を突きつけるような鋭い言葉を投げつける。兄は

その言葉を耳にして、肩をすくめる。
『あいつはドライフ皇国の【超級】である【大教授】に嵌められたらしいクマ。その結果、アルター王国は国王と大賢者。騎士団長を失う結果となった。だが、【戦王】もただじゃ終わらなかった』
勿体ぶるように、兄は態と間を空けた。
『戦争の結果は知っているクマね』
「昨日聞いた事をさすがに忘れないよ！」
問いかけられ、俺は昨日聞いた事をそのまま口にする。
「たしか、王国と戦争中にカルディナがドライフ皇国に進行して、ドライフ軍は急いで自国に戻ったんだ」
『当たりクマ。レイは記憶力が良いクマ！』
昨日聞いた事を復唱しただけなのに、兄は何故か褒めてくる。ちょっと釈然としない。
『話を続けるクマ。自国のピンチを悟ったドライフ軍は急ぎ、自国に戻ろうとした。そこにあいつは待ち伏せていたクマ』
「ほう。なかなか考えて居るの！」
ネメシスは感心したような声を出す。
『ドライフ軍はさすがの慌てたらしいクマ。何たって自国防衛の為に急ぎ、戻らないといけないその状況で【超級】による待ち伏せを受けてしまったからクマ』
「それで？　【戦王】はどう対応した？」
俺は興味本位でそれを口にすると何故か兄は溜息を吐いた。
『あいつはその場にいた皇国所属のマスターをデスペナにしたクマ』
「・・・・・・・。強いのだな」
引きつった笑みでネメシスは口にする。
『強いクマよ？　何せその場には皇国の【超級】で、騎士団長を倒した【魔将軍】もいたらしいクマ』
兄のその言葉に俺は数秒頭が空っぽになった。
「それって。・・・・・冗談？」
思わず思った事をそのまま口にしてしまった。しかし、兄は首を振って否定してくる。

『それが、【大教授】がその映像を録画していたようで、ネットにこの動画が出回っているクマ』
「用意がいいんだな。【大教授】っていうのは」
　顔を引きつりながら的外れの事を口に出してしまう。
『まあ、あいつの目的は【大教授】をデスペナにすることだったみたいクマが、それは出来なかったみたいクマ』
「出来なかった？　なんで」
『【大教授】は別ルートで皇国入りしていたクマ。だから運良くあいつには遭遇せずに済んだという訳クマ。【戦王】本人は【大教授】に相当切れていたクマ』
「自身に罠を仕掛けた奴に報復したがるのは当然と言えば当然かの」
　どこか分かっている雰囲気を出すネメシスはカップに口を付ける。
『話を続けるクマ。【戦王】はその後、残存する皇国のマスターを次々とデスペナにしていったクマ。そして、最後には物理最強と名高い【獣王】と遭遇したという。【戦王】はさすがに頭が冷え、逃亡をはかったクマ』
「少し、情けない気がするのう」
　少し悲しげな表情をするネメシス。
『当然【獣王】は逃げる【戦王】を追撃した。だが、あいつはその追撃から逃げ切った』
「逃切った！　それって本当なの？」
『本当クマ。本人から聞いたから間違い無いクマ！』
　自信ありげに兄は胸を張る。
『物理最強から逃切る事が出来るのはあいつ位クマ』
「兄貴だったらどうする？　もし【獣王】と遭遇したら」
『迷わず格闘クマ！』
　聞いた自分が馬鹿だった。兄の言うことが予想通り過ぎた事に呆れた。
「へえ！　だったら格闘してこいよ。シュウ！」
　不意に兄の後ろから聞き覚えの無い声が聞えた。その方向に目を向けると、赤く肩まである髪を後ろで纏めた男の姿があった。彼は体

を軍人を想わせる赤と金の戦闘服を身に纏いその上からフード付きの黒のロングコートを羽織っていた。
『ん？　誰かと想ったらカルキクマ。調度お
「死ねや！」
　兄の言葉を遮り、男は顔を怒りで歪ませながら短剣を突き立てるように振り下ろす。しかし兄はカルキという名前らしい男の手首を取り、その動きを停止させた。
「今日という今日は許さねえぞ！　てめぇ！　いつも勝手に俺にクエスト押しつけんじゃねえ！　こっちだって忙しい身なんだよ！」
　動きは停止されてもなお、カルキと言ういう人は無理矢理にでも件を突き立てようと力を入れる。それと同時に殺気交じる声が兄に向け放たれる。
『そんな忙しい身のカルキの為に癒やしを分けているクマ。感謝はいらないクマ』
　兄は茶目っ気たっぷりの声がその場に響く。その声を耳にしたカルキさんは顔を余計歪ませ、先程より力を入れる。
「感謝だと？　お前にそんな優しい物を送るか！　送るのはこの殺意だけだ！　死ね!!」
　そういうと、彼は反対の手にも短剣を持ち、それを兄に向け突き刺そうとする。その攻撃を兄は脇で挟んでそのまま締め上げる。
「こちとら納期開けでやっとログインしたんだぞ！　それなのにログインしてみたらクエストが馬鹿みたいに溜まっているって、どういうことだ！　説明しろよ！　俺をどこまで働かせる気だと。殺す気か！」
　その言葉を聞いて、思わず兄に呆れた顔を見せる。
「鬼畜じゃの」
　ネメシスも同じような事を想っていたようで無慈悲な言葉が放たれた。
『そんなつもりは無いクマ！　ただ日頃のストレスを発散出来るように分けているだけクマ』
　悪びれることも無く難なくそれを口にする。

「それがストレスだって毎回言ってんだろ！　っていうか離せ！　血停まってんだよ！」
　彼の要求に応えて、兄はその拘束を取る。カルキという人は両手の件を落として、手の感覚を確かめるような動きを見せる。
「毎回言ってんだろ。クエストくらい自分で受ける事出来るって。何の嫌がらせだ」
　嘆くような小さな声で彼は呟く。
「っていってもどうせお前は聞く耳を持たないんだろうな」
　と勝手に納得して溜息を吐く。
『そ、そんな事はないクマ』
「それを聞いたのは何回目だか。まあいい。クエストの半分はこなしてやるから残りの半分はお前がやれよ」
『断る！』
　兄は威勢の良い声でその要求を拒否した。その言葉に、カルキさんは一瞬だけ額をひくつかせたが、すぐに諦めたような顔つきになる。
「で、こいつらは誰だ？　見覚えの無いマスターだが・・」
　カルキさんはおもむろに俺とネメシスに疲れたような視線を向けてくる。その目に思わず体が強ばってしまう。
『お前は知っているはずクマ。俺の弟とその〈エンブリオ〉クマ』
「弟？　・・・・・・。ああ、いたな。そういえば」
　そう呟くと、彼は徐ろに此方に近づいてくる。どうやら俺の事を知っている風な言い方が気になる。
「へえ！　メイデンの〈エンブリオ〉か。珍しいな」
「ほお！　私の価値観に気付いておるのか。なかなか見込みのあるやつじゃな」
　カルキさんがネメシスを褒めると彼女は誇らしげに胸を張る。
「いけないな。自己紹介を最初にしておくんだった」
　そういうと、彼は気まずそうに頭を掻く。
「俺はカルキ・ライトロット。本名は加藤輝騎だ。約八年ぶりくらいだな、玲二」
「加藤輝騎さん？　もしかしてテル兄！」

カルキさんの本名を耳にして、俺はある事を思い出した。彼は兄の幼馴染みで、小さかった俺にいろんなお菓子をくれていた人だ。兄の大学入学を機に会わなくなった、顔見知り。
「おお、覚えていたか。だが、こっちではカルキさんと呼べ。で？そっちは自己紹介とか無いわけ？」
カルキさんに促されると、俺は自己紹介をする。
「俺はレイ・スターリング。こっちは俺の〈エンブリオ〉のネメシス」
「よろしく頼む」
ネメシスは最初会った時のようにスカートをつまんで頭を下げる。

□王都アルテラ郊外　カルキ・ライトロット
今現在。俺はレイと共にクエストを行っている。あの後、俺は少しの間、その場に居座り、レイをクエストに誘った。少しでも溜まったクエストを消費するのに人手が必要だったから。するとレイは初心者だったらしく、未だジョブも決めていないという。俺はジョブを決めた後に共にクエストを行う事を約束し、先に王都郊外に来ていた。その間も少しでもクエストを消費しようと躍起になり、進めていると、時間は午後に成っていた。そこでようやくレイはここに姿を現した。
「で、ジョブは何にしたんだ？」
「聖騎士です」
「おお！　初めてのジョブが聖騎士か！　それは凄いな」
驚いて思わず声が大きくなる。そんな俺の声を聞いてレイは照れくさそうに頭を掻く。
「おぬしのジョブは何なのじゃ？」
ネメシスは首を傾げながらそれを口にする。
「いきなりだな、君は」
出来ればその話はして欲しく無かった。だが、レイも俺のジョブに興味があるらしい。
「戦士系の超級職だ。それ以上は勘弁してくれ」

引きつった苦笑いをレイとネメシスに向ける。これの意味分かってくれるか？
「へえ！　超級職なんだ。やっぱり初期勢は凄いジョブなんだな」
「教えてはくれないのか」
レイは感心したように頷いてくれる。ネメシスは少し残念そうな顔つきをしてくる。
「お前もすぐになれるだろうよ」
そんな事を話している間に、狩り場に着いた。
「クエストはリトルゴブリンの掃討。難易度は掃討だから3だな。取り敢えず、ばらけて倒していくか」
「そうですね。ネメシス」
「心得た」
レイのかけ声でネメシスは大剣に変化して、レイの右手に収まった。
「じゃあ、俺はあっちに行ってきます」
「相手は低級だ。初心者のレベル上げにはぴったりだな。頑張ってあげて行けよ」
『おぬしも頑張るのだぞ』
「誰に言ってんだ、黒ロリ」
『ロリではない！』
割とマジな声で反論してくる。
「そんな事より二人とも。俺の為にがんばってくれよ！」
『おぬしも鬼畜の部類か！』
俺は手を振りながら、レイ達の姿を見送る。
「もう行ったぞ。第三形態で出てこい。ラクシュミー」
『承知いたしました。カルキ』
俺はレイの後ろ姿を見ながら、自分のエンブリオを呼びかける。すると、左手の紋章が光り、そこから武器が出て来た。出て来た武器は全体的に赤く、刃の所だ黄金で出来た三叉槍。俺はそれを手に為る。
「ネメシスはお前と同じ括りっぽいな。まるで姉妹のようだ。嬉しいか？　妹が出来て」

レイ達とは違う方向に足を進めながら、自身の〈エンブリオ〉であるラクシュミーに話しかける。
『お戯れを。私にはそのような願望はございません』
淡々と彼女は俺の戯言を否定してくる。彼女の言葉を聞いて、俺は残念そうに溜息を吐く。
「お前は、つまらない奴だな。生真面目で空気を読みすぎる。その上、お喋りだ。全く、誰に似たんだか」
『カルキの〈エンブリオ〉なのですから、きっとカルキに似たのでしょう』
「くっ！」
ぐうの音も出ない正論を突きつけられ、息を詰める。
「レイの〈エンブリオ〉は面白そうなやつだったな」
わざと嫌味風に口を走らせる。
『彼女はレイ殿の〈エンブリオ〉なのですから、面白いのはレイ殿のおかげだと』
「確かに、そうかもな。お前はレイは面白いと想うか？」
『そうですね。そう想います』
ラクシュミーの言葉に俺は驚く。
「お前も面白いと想うのか。なんか意外だな」
「侵害です。私は別に感情が欠如している訳ではありませんよ。戦闘に感情の揺れは命取りになるので普段から抑制の訓練をしているだけです』
「面倒な奴。まあ、いい。それで？　どういう所が面白いと想った？」
割と、興味津々な俺は彼女を問いただす。
『面白いと想ったのはただ一つですね。彼が私と同じメイデンの〈エンブリオ〉を生み出した』
「なんだ。それだけか」
落胆の声が自然と出た。
「まあ、メイデンを生み出すマスターは貴重っちゃ貴重だな」
『そうですね。・・・・・。彼は潰れないでしょうか』

ラクシュミーは憐れむような声を出す。
「生意気だな、お前」
不意にその言葉が口に出た。
『分かってますよ、主君。私達が言えた義理じゃありませんからね』
「分かってんじゃねえか。それにあいつは多分潰れねえよ。何たって、あの【破壊王】の弟だぞ？　そんな柔な奴のはずが無い」
『そうですよね。忘れてしましますが、シュウ殿は【破壊王】でしたよね』
そうだと呟き、俺は立ち止まる。話している内に俺たちは森に入り、大きめの洞窟の前にいる。
「さて、ちゃっちゃとその【破壊王】に押しつけられたクエストを消費して、俺の時間を作るか」
『カルキ。第三形態で大丈夫ですか？』
俺を案じてくれているのだろう。ラクシュミーは心配の声を掛ける。俺はその言葉を鼻で笑う。
「心配ないだろ。さっさと終わらせて、早く街に帰るとしようぜ」
それを口にし、俺たちは洞窟の中に入っていく。

□王都アルテラ郊外　聖騎士　レイ・スターリング
「おっ！　またレベルが上がった」
リトルゴブリンを倒していき、俺は順調に倒していき、俺はレベルを上げていた。
『のう？　先程から、此方に向ってくる人影が見えるのだが」
ネメシスが不思議そうな声を出す。ネメシスの声に従うように俺もその方向に目をやる。
『私にはつい、三十分くらい前に分かれたカルキに見えるのだが、これは目の錯覚か』
「そんな、まさ・・・・・」
ネメシスの行った通り、此方に足を進めてくる人物はつい三十分前

に別行動を取っていたカルキさんだった。俺は想わず自身の目を疑い、何度もこする。
「俺にも、そう見えるよ」
足を進めてくる、カルキさんは肩に赤い三叉槍を担いで、ずんずんと、此方に向って来ている。
「まさか。な」
俺はそこである予想を立てる。それが間違いであってくれと願うばかりだ。
「よう、励んでいるか？」
そうこう考えている間に、カルキさんは近くまで来ていて、軽い声を掛けてきた。
「励んではいる。だが、なんのようだ？　こちらはまだ、目標討伐数に達していないのだが？」
ネメシスが武器形態から戻り、カルキさんに怪訝な顔を見せる。
「俺はもう終わった。今日の所はこれから返る所だ」
「えっ！　もう！」
素っ頓狂な声を出してしまう。カルキさんと別れて三十分しか立ってないのに、彼は猛このクエストを終了したという。
「お前らがここいらのリトルゴブリンを掃討したら、このクエストは終了だ。だからお前らの様子を見に来た」
「あの、本当に終わったんですか？」
些か信じられずに、そのことを伝える。
「ああ、終わったぞ？　超級職だと、このくらいは余裕だな」
軽い声を上げながら、彼は三叉槍で二回ほど肩を叩いた。
「それが、カルキさんの〈エンブリオ〉ですか？」
「ん？　ああ、そうだぞ。俺は運が良かったみたいでな。とてもレア物の〈エンブリオ〉だ」
レア物という言葉にネメシスが何故か胸を張る。
「その言葉。あまり期待はしないがな。この私より、レア物など、そうそうにいるわけが無いしな！」
レア度で勝ち誇ったような顔をするネメシス。彼女の言葉にカル

キさんは何故か溜息を吐いた。
「だそうだぞ？」
おもむろに手に持っていた三叉槍に反しかける。すると、その槍は突如光り出し、その姿を変えた。
「ま、さか！」
その変化を目にして、ネメシスは焦った様に口を開ける。
「貴方の言葉を肯定いたします。確かに貴方ほどのレア物の〈エンブリオ〉はそうそう見つかる物でも無いでしょう」
三叉槍は髪を靡かせる人型になり、女性の声がその場に響く。
「ですから、貴方と同型でしたら相当なレア物である事は間違い無いですね」
声の主は赤い軍服を皆に纏った金髪の少女だった。外見年齢は十五歳くらいだろう。そんな彼女がカルキさんの隣に降り立つ。
「初めまして、私はＴＹＰＥメイデンの〈エンブリオ〉。【戦域隣妃　ラクシュミー】。以後、お見知りおきを」
彼女は胸に手を当て、柔和な笑みを浮かべながらそっと頭を下げた。
「私のレア度が！」
ネメシスはがっかりしたように肩を落としている。そんな彼女を見て、カルキさんは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「サプライズ成功だな」
それを口にすると、声を上げて笑い出す。
「まさか、こんな近くに同じＴＹＰＥの〈エンブリオ〉を持つ人がいるなんて」
カルキさんの〈エンブリオ〉に目をやりながら、俺は驚いた声で呟いていた。

2話　PK、遭遇

□アルター王国ノズ森林　カルキ・ライトロット

レイ達と分かれてデンドロ時間で四日後の夕方。俺は今、新たなクエストをするためにノズ森林に来ていた。あの後レイ達がクエストを消化するのを見て、その後は彼らに自由に行動させようと思い、その場で分かれた。まあ、そうした方がレイ達の為になるだろうしな。それにあの時、彼らのおかげであのクエストはすぐに終わった。手伝ってくれたことはとても感謝している。彼らと別れた後、睡眠と食事。トイレ以外の全ての時間を費やし未だに終わりが見えないのが現状であるが。

「今度は絶対、あいつからのクエストは引き受けねえ」

毎度ながらこのクエスト量は俺を萎えさせる。俺は片を落としてトホホと足を進める。

「その言葉。毎度聞いている気がしますが」

そんな俺の愚痴を耳にして、隣に付き従うラクシュミーはからかう様な声音でそれをいう。その言葉に俺は彼女に鋭い視線を向けるが、それもすぐに止め溜息を吐く。

「本当だよな。なんで毎回引き受けてしまうんだろう」

思い返せば、昔からそうだった。俺は一度として、あいつの押しつけてくる案件を断ったことがない。例えば、高校の時だ。あいつはその当時何やらアンクラという格闘技に夢中になっていた時期。俺はあいつにその格闘技に誘われた事があった。最初はさすがにあいつの誘いを断った。体を動かすことは好きだったが、何も積極的に痛みを伴うような事をする事に俺的にあまり輝かなかったのと、単純に興味が無かったのだ。当時俺が好きだったのはボルダリングやロッククライミングなどのアスレチックの類いだった。休日になれば、絶対にボルダリングに行き、連休になれば、少し遠い場所にある難易度が高いアスレチックへ電車を乗り継いで行ったりしていた。それくらい俺はアスレチックに嵌まっていた。

そんな俺に修一は何を思ったか、格闘技を進めてきた。血迷ったか

と思い、理由を問いただす。するとあいつは愉快そうに口角を上げ、ただ一言だけ返した。
『俺がお前を誘うのは、お前が嵌まると確信した物だけだ』
どこか自身ありげに答える修一に呆れた事を覚えている。その日の放課後、あいつがそこまで言うならと、見るだけという条件で道場に連れて行って貰った。その後、俺は済し崩し的にその同情の門下生になってしまった。
「本当に何でだろうな」
今まで疑問にも思わなかったことが今になって考えると凄く不思議である。俺は本当にあいつの誘ってくる事を結果的に一度も断ってない。毎回ある程度あいつのせいで酷い目に遭っているのにだ。どうしてだ？
「ただ、単純に俺が馬鹿なだけか」
「そう言うわけではないと思いますが。カルキは極端な考え方をするんですね」
俺の呟きにラクシュミーは不思議そうな顔をして否定を言葉にする。確かに極端な考え方だよな。
「まあ、そう考えても仕方ないだろ。俺自身それが何故か分からないんだからな。自棄になって極端な考え方だってしたくもなる」
俺は諦めた様な声音を出す。これ以上考えても埒が明かないから、俺はこの件に関しては忘れることにする。まあ、あいつにクエスト押し連れられるたびに思い出して、苦悩しているんだが。あいつは俺にどんだけのストレスを残していくんだよ。そう想うと疲れてきて、肩を落とす。
「カルキ。今日はこのクエストを消費したら帰りましょう。さすがに精神的な疲労が凄そうです」
心配してくれているラクシュミーが優しく声を掛けてくる。彼女の優しさには正直助かっている。
「ああ、そうする」
彼女の言葉に俺はただ頷く。しっかりと彼女の優しさに噛みしめて。いつもラクシュミーには助けて貰っている。そしてその分、恩も

ある。
「いつもの事ながら助かる」
俺は感謝の念を言葉にする。すると、ラクシュミーは柔和な笑みを浮かべてくる。
「私はカルキの〈エンブリオ〉ですから。このくらいは当然です」
さも当然な事のように彼女は誇ることはなく、ただ淡々と言葉を返してくる。
「そこは少しくらい反応してくれても良いところだろ？　全く、そういう所が面白みに欠けるんだ」
「そうですね。そういう自覚はありますよ」
「あるのかよ。より質が悪いな」
そんなキャッチボールを続けていると俺は自然と笑みを浮かべる。
「さて、ちゃっちゃとクエスト終わらせて早く夕飯にいくとするか」
「そうしましょう。それで、どのようなクエストなんですか？」
「ああ。そういえば言ってなかったな。この森でのクエストは、この森林の木を食い散らかす害獣の掃討だ。まあ、三十分のあれば終わる内容だな」
俺は少し欠伸がちに害獣を探す為に周りを見渡す。夕暮れ時で森林はもうすぐ闇に包まれる所だ。しかし、俺は夜目も利くので問題はまり無い。
「ラクシュミー。第二形態だ」
すぐにクエストを始めるために彼女に命令する。彼女は何も言わずに、ただ、俺の指示に従って第二形態に姿を変えていく。ラクシュミーの第二形態は両刃の長剣だ。刀身は第一形態とは違い、黄金の刃。ガード下は赤い装飾がなされている。俺は彼女を左手に持つとすぐに逆手にし、腰の位置に据える。その間も俺は目的の害獣の捜査を続けていた。
『どうですか？　見つかりましたか？』
「いや、さすがにこの時間に来たのは不味かったかもな。もう少し夜にならないと、害獣共は動いてくれないらしい」
辺り一面見渡しても、害獣の気配は全くというほど感じられ無かっ

た。
「これはちょっと時間が掛かるか？」
『そうかも知れませんね。ですが気長にやっていきましょう』
ラクシュミーが少し微笑を溢したような声を漏らす。俺はその声に従うように欠伸をしながら言葉を返す。
「そうだな。少しここら辺を探りながら夜になるのを待つとするか。そうすれば少しはまともな害獣が出てくるだろうしな」
『歩いていたら、何かいるかもしれませんしね』
その言葉に頷き、俺は足を進める。

□ノズ森林　カルキ・ライトロット
それから三十分ほどでノズ森林は完全に暗闇に支配された。まあ、夜目の効く俺には今も昼間と変わらない位見えているわけだが。そんな俺は今、要約で始めた害獣の駆除を行っている。
「これで三十匹。まったく、こいつらは一体どこから湧き出てくるんだよ」
害獣に突き刺したラクシュミーを抜き、彼女に吐いた血液を拭いながら、そんな愚痴が出てくる。
「それこそ、初心者連中が毎日ここで駆除しているっていうのに。それでも一向に減る気配がないとか。どんな生態系バランスだよ」
『そういう設定になっているのでしょうね。初心者がレベルを上げやすいように』
そんな俺の愚痴にラクシュミーは真面目に答えてくれる。全てはあの管理ＡＩのせいなのか。まあ、ゲームバランス的にいったら良い仕事をしてくれているんだろうな。だが、しかし。今の俺に取っては凄く迷惑な行為な事は間違い無い。
『ですがここまでモンスターが増えるのは他の要因があるのでしょうね』
「他の要因だと？　何か知ってるのか」

些か疑問の残る言い方に引っかかり、それを聞き返すと彼女は『ええ！』と発し、言葉を続けた。
『昼頃。クエストに向うためあなたと共にアルテラを出ようと歩いている時のことです。その途中マスター達が集まっている所の近くを通り過ぎましたよね』
そんな事あったか？　俺は覚えてないな。
『あったんですよ。あの時カルキは全く減る気配のないクエストの量に絶望していて俯きながら歩いていたので分からないかも知れませんが』
だったら俺それ見てないのしょうがなくね？　誰だって気持ちが沈んだときは俯いて歩く事なんてあるだろう。
「まあ、いいさ。話を続けてくれ」
『はい。それでですね。少し気になって、その会話を盗み聞きしたんですよ。そしたらちょっとびっくりしました』
その言葉の途中から、俺は奇妙な感覚に襲われた。それはまるで暗殺者に命を奪われる寸前のような感覚。それを意識し始めると、自然と俺は周辺の雰囲気が変わっていることに気付く。どこからか俺を狙っているな。それを探りながら俺は彼女の会話に耳を貸し、そっと警戒を始める。
「何かあったのか？」
口にした言葉からその警戒神が僅かだが漏れてしまった。それには俺もその声を出そうとは思っていなかったから内心驚いている。その言葉から、彼女も周辺の雰囲気が変わっていることを理解したらしい。彼女は冷静なトーンの声音と成り、言葉を続ける。
『聞いた話によると。今、王都に面する四つの狩り場で初心者を狩るＰＫが出るようなんです』
彼女の言いたいことは大体分かった。そのＰＫ連中のせいでノズ森林に蔓延る害獣共が急増中って事か。傍迷惑な奴等なだな。そういえば一ヶ月前ぐらいにログインした時、変なクエストが王都で発効されていたな。内容は確か初心者狩りだったか？　誰が受けるんだよと思ったが、どこにでも馬鹿はいるんだな。そんなクエストを受け

るんだったら俺の溜まりまくったクエスト緒消費を手伝ってくれよ、頼むから。
　そんな事を考えていると、後方から銃声が数回聞こえた。きっと先程から俺に狙いをつけていたＰＫさんだろうな。ラクシュミーが話をしているときに現われるなんて。本当にタイミングが悪い。
「マスターを狩らずに害獣を狩れよ。傍迷惑なＰＫさん」
　呆れた声を出し、振り返りざまに放たれた弾丸を第二形態で全て切り落とす。こういうときアームズ系の〈エンブリオ〉は重さを感じなくていい。とても振りやすいからな。切り落とした弾丸に目をやると、それはモンスターのような形状をしていた。
「あんたさ。こんなことしてて楽しいか？　そのくらい銃の腕前が正確ならきっと他にも仕事あっただろ。何でこんな胸くそ悪いクエスト受けたんだよ」
　俺は先程弾丸が飛んできた方向に呆れた顔を向ける。しかしそこにはもう人影が見えない。きっと移動したんだろ。俺を確実に仕留めるために。
「これ以上攻撃して来るの止めてくんないかな？　さっきの一撃で分かったろ？　俺は初心者のマスターじゃないって事くらいは。これ以上攻撃してくるんだったら、俺は容赦しねえぞ」
　語り聞かすような声でＰＫに問いかける。俺は少しの時間その反応を伺うようにジッとその場を動かなかった。まあ、返答なんてくるわけ無いが。だが、その予想はあっさり違う形で帰ってきた。先ほどの言葉から十秒位経った頃。ＰＫから返答が来たのだ。当然ながら悪い意味で。俺の右手の方向から数回の銃声が鳴り、モンスター型の縦断が俺に向かい、襲いかかってくる。その弾丸達は全て揚々良く切り落とし、俺は溜息を吐く。
「ＯＫ、分かった。引く気は無いと言うことだな」
　相手には明らかな戦意があることは確認した。俺を狙ったんだ。ただじゃ帰さねえぞ。身に纏っていたコートに手を掛け、それを脱ぎさる。
「ラクシュミー。スキルを使う。準備をしとけ」

『もう準備は完了しておりますよ。我が主君』
　相変わらず準備の早いことで。出来る〈エンブリオ〉を持つと楽で良いね。
「忠告はしたからな」
　その言葉に当然返答は帰ってこない。来るわけがない。だが、明らかに近くにはいるだろうＰＫに俺は少しドスのきいた声で話かける。
「俺に喧嘩売ったんだ。後悔させてやる」
　それを口にしつつ、俺は自身のスキルを発動させるべく両手で長剣を持ち、それを体に隠すような構えをとる。
「敵勢に死を招く斬撃（ストライク・デッドスイング）」
　スキル名と共に俺は長剣を水平に鋭く振り抜く。このスキルは俺に不愉快さを与えた相手に使用すると、その者がデスペナになる威力の斬撃を生み出す。これが当たれば蘇生アイテムを持っていない限り必ずデスペナルティーになる必殺スキルの一つ。その射程距離は約１００メートル程。現に正面一面にあった木達は１００メートル先まで音と共に伐採されて、その場だけ切り開かれてる。だが、このスキルには問題がある。
「当たったが、死んではいないな」
　それは蘇生アイテムだ。現に今ＰＫに向けて放った一撃には、其奴に当たった感覚があったが、きっとすぐに蘇生したがろう。そして挙げ句の果てに今現在、其奴がどこにいるか分からない状態。
「結局は逃げられたか。さて、一体どこに行ったのやら」
　おもむろに腰につけてあるアイテムボックスに手を伸ばし中を漁る。感触だけを頼りに目的の物を探り、それを見つけて勢いよく取り出す。それは橙色のヘッドホン。それを耳に当て、俺はそっと目を閉じる。
「範囲は森全体。ＰＫを探せ、ソニックカイザー」
　起動の言葉を発すると、俺の耳にはこの森の全ての音が聞えるようになった。このソナーカイザーは最近倒した〈ＵＢＭ〉の戦利品だ。上半身がコウモリで下半身がイルカのような体をした奇妙な奴で、名の通り音を武器にしていた個体だ。其奴を倒した結果、俺はこの割と

便利なアイテムを手に為ることが出来た。これの能力は指定した範囲の音の徴収で、目的の音を拾い取る。それによって、現在ＰＫがどこで何をしているかなどの事が手に取るように把握出来る。
「おお、逃げてるな」
　方向的には王都側か。感じとれる音からしてＰＫは逃走の真っ最中の様子。さて、どこで止まるかな？
「出来ればそんなに遠くに逃げてくれるなよ・・」
　溜息交じりの声で言葉を吐き、ながらＰＫの発する音を聞き続ける。するとその音に変化が起きる。
「止まったか。案外早いな」
　大体距離にして５キロぐらいか。
「少し舐めすぎだろ。これでも【超級職】なんだがな」
　自然と呆れた声が出た。確かにさ、言ったよ？　そんなに遠くに行くなと。だけどさ。休憩するなら少なくても１０キロの所でだろ。
「まあ、本人からしたら逃げた方なのかも知れないな」
　こればっかりは人によって感じ方が違うから仕方が無い部分もある。
「さて、行きますか」
　ＰＫの意場所は分かった。あとはその場に行き、デスペナさせるのみ。そう考えていると、ふとある事が頭を過ぎる。
「なあ、ラクシュミー。クエストはどうする？　ＰＫをデスペナさせた後に続けるか？」
　少し弱々しい声で彼女に問いかける。するとその声から俺の上体を察してくれるラクシュミーは俺の言葉を否定してくる。
『それは得策ではありませんね。今日の所はＰＫを倒したら王都に戻りましょうか」
「助かる」
　感謝の言葉を口にして、俺は一度体の力を抜くために深呼吸をする。体の力が抜けきった事を確認し、俺は手にしていた長剣状態のラクシュミーを逆手に持ち替え、体を伸ばす。
「これ以上は逃さねぇよ」

その言葉を口にして、俺はクラウチングスタートの状態に体を持って行く。
「ラクシュミー。準備は出来た。カウント5だ」
『分かりました。では早速行きます。5！』
彼女は早速カウントを始めた。これは俺が何かを始めるタイミングを掴むために必ず行う儀式のような物だ。俺は昔から自分の心の中で何かを始めるタイミングの時必ずこれをやっていた。だけど、この世界ではその役割を彼女に任せている。なんといっても彼女の方が時間に正確だからな。安心できる。
『4！　3！』
っと、そんな事今はどうでも良い。俺は全身の力の抜けきった体を一気に力ませる。
『2！』
腰を上げ足に全身で貯めた力を込める。
『1！』
さあ、鬼ごっこの始まりだ。すぐにデスペナルティーにしてやるからな。覚悟しとけ。
『0！』
カウント終了と共に俺はＰＫの居る場所まで駆け始める。俺は目を鋭くして、まだ見えぬその場所を見据える。

3話　考察

□ノズ森林　【絶影】マリーアドラー

私はアルター王国王都アルテラ北部に面するノズ森林にて、初心者ＰＫをしています。正直このクエストの内容に多少忌避しましたが、これまでこういったことをしてこなかったので良い経験だと思い、思い切って受けてみました。私が請け負っていたのはこのノズ森林で、この場所に入ってきた初心者を片っ端にＰＫにしていきました。その過程で面白い人物も見るけることが出来て、このクエストを受けて良かったかも知れないと思っていました。つい先程までは。

「何なんですか、あの人。僕が救命のブローチを持っていなかったら確実にデスペナになっているスキルをブッパするなんて」

その人物から辛うじて逃げられた私は今先程いた場所より５キロぐらい離れた場所にある木の根元に腰を預けて乱した息を整えている最中だ。正直このクエストを少しだけ甘く見ていた。その件は私自身の認識の甘さを恥じる。だけど言わせて欲しい。そこまで強いのに今更ここに何の用事があるのだ。あそこまでの威力だと、第六形態の〈エンブリオ〉。もしくは〈超級〉に至っている人物かも知れない。確かこの国では五人の〈超級〉がいるはず。そう思い立ち、一度息づかいを普通にしてからそっと指を折り始め、今敵対している相手を探る。

「直接攻撃を仕掛けてきた時点で月世界ではない。酒池肉林は確か女性のはずですからこれも違う。そこまで奇抜の衣装を着ている訳でもないから無限連鎖も外して良いですね。となると残る二人は・・・・！」

最も厄介な二人が残って、変な汗をかいています。きっと冷や汗でしょう。

「討伐ランキング第一位の【破壊王】正体不明。第二位【戦王】防御不能」

口にしていて、私に絶望感が襲ってきました。何ですかこの二人。アルター王国で一番敵に回しちゃいけない二人じゃないですか。圧

倒的な討伐数で一位をとり続ける【破壊王】と、毎月彼に追いつく程の討伐数を叩き出す【戦王】。私は直接目にした訳ではないけれど、アルター王国とドライフ皇国との戦争時には一度だけこの順位が変わったらしい。その次の月には戻っていたというが。話に聞くと、その戦争に唯一参加した〈超級〉が【戦王】のみだったとのこと。そして戦争後に、ドライフ皇国のマスターを全滅に近いところまで追い詰めた結果があの順位らしい。私もその件に関して詳しく聞いていないのでこれ以上はなんとも言えないが。

いや、それを思い出している暇など無かった。今はどうすればうまくその人物より逃げおおせるかということが問題なのだ。

「多分。いや絶対追って来ますよね？」

いきなりデスペナになるスキルを放って来る相手だ。そう簡単には逃してくれないだろう。ああいう手合いの人物は一度的と認識した物には容赦が無い。きっとどこまででも追ってくる。

「なら速く逃げた方が良いかもしれませんね」

溜息を吐きつつ、それを呟き、アイテムボックスに手を突っ込む。少しの時間中をごそごそとあさり、目的の物を取り出す。

「あのスキルは厄介ですからね。これくらい準備しないと」

疲れたような声を出しつつ、今出したアイテムに目をやる。それは救命のブローチというアイテムでこれを着けていれば、大抵の場合デスペナを回避為ることが出来る代物だ。これで何回かはあのスキルを受けても生き残れる。あのスキルの詳細は分からないけど、きっと回数制限の無いスキルなのだということは分かる。宋で無ければ初っ端からあのスキルを使うことはないと思うから。そして何故あの危険極まりないスキルを使ってきたのか。あれを使用させるほど彼は激怒していたから。まあ、それを仕掛けたのは私なので、自業自得といってしまえばそうなんですが。ですが、言い訳を聞いて欲しい。あの時彼は此方に向け、何かを話駆けてきていました。けれども私はその声は全くと言っていいほど位置上の関係で耳に届かなかったんです。何を言っているか分からず、取り敢えず攻撃を仕掛けたところ、反撃であのスキルを発動させたんですよ？　過剰防衛も良いと

こだと思います。その生で、念のため着けておいた救命のブローチが一つ砕けきってしまいましたよ。まあ、私が買った者じゃないので、強く言えませんが。あれも今手に持っているこれもＰＫに初心者のアイテムボックスから抜き出した物なので私が買った者ではありません。そもそもこういう物を身につけないでクエストに来るとか命知らず過ぎるでしょう。

まあ、それは置いといて。私が考えるに、あのスキルの弱点はこれなのだろう。先程あのスキルを掠った私はこれによって命を救われた。これは経験した事なのでまず間違い無いでしょう。取り敢えずこれを持っている限りは私は死ぬことは無い。多少心持たない感じもしますが、アイテムボックスにはまだ存在しますし、必要になったら取り出せば良いですよね。そう考え私はそれを懐にしまい、勢い良く腰を上げる。

「まだ、追ってきては居ないようですね。今のうちに！」

今逃げてきた方向から追ってくる気配を探り、それを感じなかった。それを良いことに私は今腰掛けていた木の枝に軽く跳躍して飛び乗る。そこで再び追ってくる気配がない事を確認し、私は木の枝を使って逃亡に移る。幸いここは森だ。いくつもの木が存在し、私の体重を支えられる枝も沢山ある。それに追ってくる人物もまさか本当に枝を伝って逃亡を図るとは思っていないだろうし。そんな事を頭の中で思いかながら枝を跳躍し、次男枝に飛び移っていく。

「どうかこのまま逃げ切れますように」

逃亡を始めてから5分くらいした頃。私は心にもない願いを口にしてしまった。そんな事はきっとあり得ないのにだ。あの手の人物はどうせ逃がしてはくれない。今私の事を逃がしているのもきっと絶望を与えるためとか言って態と逃がしているんでしょう。遠目でしか見えなかったのでよく分かりませんけど、そういうことを為る人には見えませんでしたけどね。

「まあ、人は見かけだけじゃ何を考えているか分かりませんしね」

実際に話してみないと人なんて分からない物だ。そう勝手に結論づけて私は逃げに徹る為に正面に目を据える。

「ＰＫをやる割には真面な意見も言えるんだな。それに関して言えばとても同感だよ」
　不意に真横から私の発した言葉への行程の声が聞える。その声を来た瞬間私は一瞬だけ思考が固まる。しかし体はすぐに対応したみたいで自身の〈エンブリオ〉である銃口を先程声が聞えた方向に向けており、すぐに引き金を引いた。音と共に万スター型の銃弾が何体か射出されたタイミングで私はやっとその方向に目を向けることが出来た。
「なっ！」
　目にしたのは先ほどデスペナに成るスキルは放ってきた彼が私が撃った万スター型の銃弾を全て切り落とした所だった。それを終えると、彼は此方に目を向け、優しげに口角を上げた後に、剣先を此方に向けた。何を為るのかと観察を続けていると、おもむろに剣を振り上げる。それと同時に剣から先程ほど見えた仄かにオーラの様が漏れ出していることに気付き、私は急いで枝から飛び出し、地上への落下を始める。
「敵勢に死を招く斬撃（ストライク・デッド スイング）！」
　彼はまたあのスキルを放った。それは先程まで乗っていた枝のある木を切り倒す。しかし、それだけではこのスキルは終わらなかった。なんとこのスキルは結構な飛距離を出せるスキルだったらしく、その斬撃は勢いを保ったまま、次々と木を切り倒していく。その時にはあのスキルより難を逃れた私は地上に着地しており、ただ切り落とされるのを見ているしか無かった。
「あっぶなっ！」
　焦りが込められた声が出た。あと少し逃げるのが遅かったらあのスキルが直撃していた。救命のブローチを着けているためすぐにデスペナになる事は無いけれど、なるべく当たりたくは無いスキルだ。
「危ないだろうな。そういうスキルだから」
　不意に先程の声が上から聞えてくる。咄嗟に恨みがちに目を向けるといっぺんの笑みも溢していない先程の男の人が枝の上から此方の位置を確認し、そこから降りた。体重を崩さずに着地を為ると、此

方を見据え、持っていた長剣を地面に突き刺す。
「さて、俺のスキルを避けたお前はさっき俺を襲った奴で間違い無いよな？」
　柄に手をそえたまま、質問を投げかけてくる。その質問に私は答え変えている。どう答えるべきか悩んでいるのだ。考えを纏める時間はあまりにも短い。そんな中でも私は苦し紛れに口を動かす
「いやぁ！　すいません。モンスターと勘違いして撃ってしまったんですよ。ほら、この暗闇の中。何かそれらしい輪郭が見えたらモンスターと思うじゃ無いですか！」
　それらしい事を言えた自分の口を褒めてやりたい。結構うまい返答では無いのか、これは。
「そうか」
　彼は私のでまかせを耳に為ると、少し呆けた様な顔をする。これはチャンスと悟り、続けざまに新たなでまかせを先程言ったことと矛盾しないような付け加える。
「そうなんですよ。ボクは少し前にこのゲームを始めたばかりなので、こういう経験が初めてなんです。だから貴方を誤って撃ってしまったんですよ」
　彼の動作が分かるように目を向けたまま、私はそっと頭を下げる。彼は少し眉を顰めつつも私を見る目は変えなかった。
「一つ、聞いて良いか？　俺がなるべく大きな声で話しかけた言葉、聞えてたか？　それにそれを聞いた後でなんでまた攻撃を仕掛けた？」
「っ！　それは・・・・」
　きつい視線を向けながら彼は再び質問を投げかけてくる。たしかに、彼は何かを此方に問いかけた後に私は再び、攻撃を仕掛けた。だが言わせて欲しい。正直彼が発したであろう言葉は全くといって良いほど私の耳には聞えなかった。地理的に私は持っても声の聞き取りにくい場所に陣取っていたのだ。あれは彼が格上だとわかり、それで逃げる前に最後に試した攻撃だった。私の攻撃が効くのか。それが知りたかったから。結果は全く通じず、阿波場デスペナになるところだった。でも、どうする。聞えなかったといって、再び攻撃を仕掛

けることはそれだけで此方に戦意があったことを示すような物だ。良い言い訳を考えないといけない。
「もちろん聞えていましたよ。あ、あのですね。あれはその、間違えてしまったんですよ！」
　考えが八方塞がりで思考的に追い詰められた私が口にしたのは嘘の肯定と本当に苦しい言い訳だった。しかし一度口にしてしまった物は、どうあっても取り返せない。この言い訳を突き通すしか無い。
「間違えた？」
　少し疑っている様に眉を秘める。それはそうですよね。
「そうです！　間違って撃ってしまったんですよ！　その、貴方に言われたとおりに逃げようとした時に、間違って引き金を何回か引いてしまったんです。それにまさか間違って撃ってしまって貴方の所に向っていくなんて思いもしませんから」
　自分っでも思うくらい苦しい言い訳。しかし、それを聞いて彼はその話を真摯な顔つきで頷きを入れながら効いてくる。案外馬鹿なのかも知れない、この人は。
「まあ、俺が言ったことは分かっているっぽいから、そうなんだろうな」
　しかも、奇跡的に当っていたっぽい。これは凄くラッキー。
「だが、お前の言ったことには矛盾がある。そもそも俺はお前の言ったことが本当かなんてことは知らない。それにお前からは嘘の香りが凄くするんだが」
　鋭い目つきはそのままで彼は呆れた様な声を出す。どうしてですか！　分かっていました。でも、ここまで来てもう後戻りは出来ない。このまま突き通せるだけ、突き通してみます。っていうか嘘の香りって難ですか！
「嘘じゃ無いですよ。本当に間違って撃ってしまったんですよ。その、謝りますから許してくださいよ」
　必死で手をこすりながら頭を下げる。その間も一切彼の動向から目は離さないけれど。為ると、彼は突き刺していた剣を引き抜く、肩に担いだ。

「お前の言葉の矛盾点は二つある」
二本の指を突き出して、彼は何やら私の言ったことの矛盾点をついてくる。私は彼の言う矛盾が気になり、その声に耳を傾ける。
「まず一つだ。そもそも、今、王都を囲む四つの狩り場では初心者狩りのＰＫが行われている。それはアルテラ中に流れている情報だ。そんな所に初心者が来たら、是非買ってくださいと言っている様な物だろうが。しかも、つい最近始めたばかりだというのに、お前は未だに狩られていないことも、可笑しいよな」
彼の言葉で私は図星を疲れた様に一瞬だけ、顔を硬直させる。それもそうだ。なにせ、その情報は私の耳にも入っていた。それを失念していたとは。私がその件を悔しがっている間に彼は剣を構える。
「二つ目。そもそも初心者が俺のスキルから逃れる術なんて無いし、況してや逃亡を図る事なんて不可能なんだ。それが出来ている時点でお前が相当ん場数をこなしているという証拠になる。そして、暗闇から狙撃為るというこの森に潜むＰＫの特徴とも一致している。お前がＰＫだって言うことははじめから分かっていた」
その言葉を耳にいて私は冷や汗が止まらなく為る感覚に陥った。しかしそんな私の事などお構いなく、彼は言葉を続けていく。
「そしてお前はどうやら俺の言いた井子とはただ一つだ。このまま逃げられると思うなよ！」
言葉を言い終えると同時に、ものすごい勢いで此方に駆けだしてくる彼。もう言い逃れが出来ないと察して私は咄嗟に手に持っていた〈エンブリオ〉の銃口を向け、引き金を数回引く。射出された弾丸はすぐにモンスターと化して、彼に襲いかかる。しかしすぐにその弾は全て切り落とされる。しかしこれでいい。少し時間が出来た事によって私は自身のスキルを行使する時間を得られた。
「《影分身の術》」
これによって、私は誤飲にまで増える。他の私達に目配せを為ると、皆、すぐに森林の影と馴染んでいく。そっとアイテムボックスに手を伸ばして、その中から近接用の短剣を備え、今向ってくる彼を迎え撃つ。

「スキルは使うな、ラクシュミー」
　微かに聞えたその声に疑問を持ちながらも、私の短剣と、彼の長剣が甲高い音を上げて衝突する。本当なら得物のさで押し巻けるかも知れませんが、この短剣は普通じゃ無いのでそうは成らなかったみたいですね。初めて間近で見た彼の目からは興味８割、疑問２割ほど感じられます。
「お前は、何物だ？　この国のマスターじゃないな。あの移動法と良い、今使用したスキルと良い。天地の下級ジョブの忍者の系譜か？」
「ご明察ですよ。私は天地のマスターです。故あって、今はこの国に来てさ生計を立てていますよ」
　そこで一度言葉を句切り彼の態勢を崩そうと剣を払いのけます。しかしうまくは行かず、内心舌打ちをして後退をはかりました。
「そういう貴方は誰なんですか？　先程のボクに追いつくまでの時間が明らかに早すぎる。あれは超級職の早さだ。それにあの凶悪極まるスキルの威力。あれは《上級エンブリオ》では決して出ない火力ですよ。それこそ超級に至っていないと出せないほどの」
　私の言葉は風の音と共にその場に響く。しかしそんな事はお構い無しに私は言葉を続ける。
「この国で〈エンブリオ〉が超級に至っているのは確認されているだけで五人。貴方はその五人の中に貴方は含まれていますよね。月世界と酒池肉林は女性である事が確認されていますから違うとして、貴方は残りの無限連鎖、防御不能。そして正体不明の内の誰かですよね？」
　少し自信なさげに声が徐々に小さくなっていくのが分かる。それでも彼の耳には届いた様子だ。私の言葉を耳にした彼は明らかに口角を上げ、鼻で笑う。
「なんだ、そこまで分かっていたのか。案外めざといな。さっきの苦しい言い訳を平然としてくるから馬鹿だと思ったぞ！」
　からかう様に此方の発言に上げ足を取りつつ、彼はからからと笑う。その反応を私は行程と捕らえ、余計背筋が冷える。
「なら、俺が誰か教えてやるよ。ラクシュミー、第四形態だ」

彼の言葉に従うように長剣は姿を変える。それは六角錘の形をした彼の身長と同程度の大棍棒だった。錘面の所には金と赤が交互に入っており、六角面は黒で統一されていた。彼はそれを地面に叩き付け、その場を轟音と共に抉る。

「ご明察の通り、俺は【戦王】。戦士系超級職の【戦王（キング・オブ・プロエリウス）】」

彼は大棍棒を此方に向け、言葉を吐き捨てるように言い放つ。

「俺に喧嘩を売ったんだ。後悔させてやるよ」

卑しい笑みを浮べつつ彼はそれを言い切った。

４話　戦王対ＰＫ

□ノズ森林　【戦王】カルキ・ライトロット

「俺に喧嘩を売ったんだ。後悔させてやる」

口にしていくと自然にいたつげ名言葉使いになっていく。しかし今はそんな事気にせず、ラクシュミーの第四形態である大棍棒を肩に担ぎ目の前のＰＫに向け走り出す。彼女は此方が駆けだしてくる様子を眺め一瞬だけ踊ろう多様な表情を浮べたがすぐに気持ちを切り替えたのか、感情を一切殺しおもむろに後退を始める、何を為るのか興味は持ったが、速度的には此方が圧倒的に早く彼女との距離は最早振れば当る所まで近づいている。そのタイミングで肩に担いでいたラクシュミーを掲げ上げ、勢い良く彼女の体を砕かんと振り抜く。その際自分の体を一瞬だけ中に浮かせることでこの打撃は威力を増す。

「っ！」

しかし、間一髪のところでその攻撃はよけられた。彼女の体を砕くはずだったラクシュミーは吸い込まれるように地面に叩き付け、その場を土煙を上げて軽く抉る。再び攻撃を仕掛けようとし、一度持ち上げようと試みるも彼女から急激な重みを感じられた。何事だと思っても今は土煙が視界を阻んでよく見えない状況だ。おもむろにラクシュミーに目をやるとその場だけぼんやりと見え始め。しかし見えるのはそれだけではない。彼女の上に足をのっけている人影も同時に見えたのだ。その人影は腕を此方に向け、手に持った銃の引き金に手を掛ける。

「ふんっ！」

引き金は引かれ、至近距離より銃声が成る。咄嗟に俺は銃を蹴り上げて弾の射出角度を変える。狙い通り角度を変えられた俺は僅かに的外れな場所に飛ぶモンスター型の弾丸に一瞬だけ目をやり、蹴り上げた足で人影の腹部目がけキックを入れる。

「うっ！」

当った後退する感触と彼女のうめき声が耳に届く。いざ目の前の人影があったところに目をやると最早そこにはそれらしき影は見当

たらない。俺はに持ったラクシュミーを引きずりその土煙から抜け出すため、足を進める。物の数歩でそこから抜け出すと腹部に手をやるＰＫが苦笑いしている姿が目に見えた。
「女性相手に腹部を狙うとか、あり得ませんよ」
　苦笑いをしているＰＫは苦笑いを為ると、おもむろに腹部から手を離してもう一度此方に銃口を向ける。
「戦いに男も女も。堂々だろうが卑怯だろうが関係無いだろ？　それに軽口をたたけるくらいしかダメージを食らってないくせに文句言うんじゃねえ」
　視線はそのままにそっと頭を掻く。その隙を流さない彼女は再び数回引き金を引く。今度は邪魔する者はいないため真っ直ぐと銃弾は向ってくる。俺は引きずっていたラクシュミーを持ち上げ、横一閃に振り抜く。モンスター型の銃弾はその一閃で全て打ち落とされた。俺からしたら全く重さを感じないラクシュミーであるが他の物からしたらそれは超重量を持つ立派な武器。証拠に落とされたそれらは最早原型を留めていなかった。
「ったく。お前も人のこと言えねえな」
　苦々しく思い、呆れた様な言葉が自然と出る。すると彼女はあっけらかんとした表情を浮べる。
「このくらい、なんとも思っていないのによく言えますね」
「・・・・・・。まあ、そうだ」
『カルキ、後ろです！』
　言葉を言い終える前にラクシュミーが不意に後ろから襲いかかるような気配を感じ取る。彼女の指示に従い、体を反転させると、そこには彼女が先程使用したスキルによる三体の分身が今まさに襲いかかろうとしていた。軸を乱さずに反転していたお陰ですぐにラクシュミーを動かす事ができ、おれはその不意打ちを仕掛けてきた三体の分身を纏めて吹き飛ばす。
「きゃっ！」
「ぐっ！」
「おふっ！」

襲ったつもりが逆に返り討ちに遭い、おまけにその攻撃をもろに食らった分身達はそれぞれ苦悶な声を上げながら暗闇に消えていく。その間に背後からの銃声が耳に響く。さすがにこの攻撃を打ち落とせない。
「っと！」
その場でジャンプして大木の枝に乗り移ることで攻撃を回避したおれはおもむろに彼女が居た場所にに目をやる。しかしその場には誰の姿もなかった。一瞬逃げられたかと思ったが、顔を上げた先で何かが光るのが見えた。あれは金属の輝きだ。それが勢い良く額目がけて向ってくる。それが当る直前でそれを掴み、金属部分に目をやる。それはまるで鏡のように透き通った代物であった。不意にその刃に人影が映り込む。
「ぐっ！」
反射的にその刃で映り込む人影を切りつけると、それは痛がるような声を上げてまた暗闇に消えていく。それを確認して、掴んだ刃を投げ捨てる。
「分身か。本当に厄介なスキルだな」
『第四形態じゃさすがに分が悪いんじゃないでしょうか？』
「そうかもな。悪いが第一形態に成ってくれ」
『分かりました』
指示にすぐに従い、彼女は第一形態である片刃剣に姿を変える。その間に反対側の手でアイテムボックスに手を突っ込んで片刃の短剣を取り出して、首に掛けていたソニックカイザーを耳に当てる。
「全部探せ」
おもむろに呟くと、ソニックカイザーは一秒も待たずに本体分身関係無く、全ての位置をおしえてくれる。
「数は十二か。どれが本物かは今は良いな。全部倒せばいいわけだからな」
口にして、俺は両手にしている刃をどちらも木に深く差し込む。ラクシュミーは今乗っている枝に。短剣は木の幹に。容易には抜けないよう。両手が開くと二つともアイテムボックスに手を突っ込んで

ある物を取り出す。
「じゃあ、いろいろと驚いて貰おうか！」
俺が今取り出した物。それは二丁の長身の銃だ。言葉にすると共に分身が居る方向にそれぞれ銃口を向ける。それを目にして驚いているような声も聞える。俺はそれぞれ三発ずつ撃つ。それは真っ直ぐに彼女らに進んでいく。二発は分身を貫き、その気配は消えさる。残りの四発は迎撃されてしまい当ることもなかった。しかしめげずに俺は銃に残った残りの四発。合計八発を撃ち尽くす。予想通りというかそれら全ては当らずじまいに終わる。しかしそれでいい。役目を終えた銃をアイテムボックスに戻し、再び両手を剣の柄に戻し、それを引き抜く。ゆっくりとした動きで顔を上げる。
「分かってんだよ！」
顔を上げた直後、襲いかかってくる彼女。又は彼女の分身が目に入る。手には鈍色に光る短剣が握れらており、斬りかかってくる。　素早い動きで短剣を持っている方の腕を上げると同時に金属が擦り合った甲高い音が響き渡る。
「どうだ？　驚いただろ？」
自然と口角が上がり、彼女に問いかける。するとそれに答える酔おうに迷走そうな表情を浮べる。
「ええ、それはもう。まさか銃を使ってくるとは予想もしてませんでしたよ」
言い終えると彼女は俺から離れようと後退する。しかし逃す気のない俺は咄嗟に後退しようとする彼女に足を掛ける。バランスを崩した彼女は、どうすることも出来ず眼下に落下していく。そこで気配は消えた。
「残りは９」
一度屈んで弾みをつけ、一向絵の枝に飛び移る。為ると途中で両手に短剣を持った彼女が斬りかかる。
「残念だな」
斬りかかろうとする彼女に蹴りを入れ、さらに両手に持った刃で切り払う。刃からはどちらも当った感触が感じられ、内心ほくそ笑みそ

れを地面に向け蹴り落とす。そこからはどうなったかは言わなくても分かるだろう。無事に上の枝に飛び乗った俺はある方向に目をやる。するとそこから浮かび上がるように彼女の姿が現われる。
「さすが超級と言うべきですかね？　あっという間に四体もやられるなんて」
　困った様な顔をして、彼女は溜息を吐く。その問いかけに俺は鼻で笑う。
「お前も中々やる方なんじゃないのか？」
　無表情ながら言葉を返す。すると彼女も仄かに笑い声を上げる。
「「お世辞でも嬉しいですよ？」」
　その声は三方向から聞え、どれも同じ回答を為ている。別に驚きもしない。ソニックカイザーの恩恵でその宝庫にいる補とは想定済みだったからな。俺は目を巧みに使い、目の前に居る彼女以外の声を出した分身に確認の為僅かな時間だけ感覚を向ける。
「面倒な奴・・・」
「「褒め言葉として受け取っておきますよ」」
　言い終えると、声を発声していた3体が銃口を向ける。それらはそれぞれ六回引き金を引き、合計18体のモンスター型銃弾が射出される。
「っ！」
　舌打ちを一回鳴らし、俺は行動を取った。まず最初に為たことは回避出来ないようにと仕込んだであろう、俺の足を固定仕様とした二体の分身をラクシュミーと短剣で切り裂いた。似たいの分身は斬撃を入れると霞の様に消えていく。しかしそれを見届けることは出来なかった。その前に射出された銃弾が今にも俺を噛みつかんばかりに迫っていたのだ。それも三方向から同時に。全部切り落とすことは可能。しかし多分この後も弾丸は打ち続けられる事は予想が出来た。それだとコチラの体力が持たないかも知れない。俺は瞬時に判断して、三方向に内、一方向に背を向ける。
「ラクシュミー！」
『敵攻阻（ヘンダー）む隣妻（シータ）の加護』

俺の考えを理解したラクシュミーは咄嗟にそのスキルを発動させる。このスキルはラクシュミーの能力特性の一つをを守りの方に生かした、彼女だけが使える防御スキル。彼女の能力特性は主に分けると二つある。一つ目は俺が防御不能と言われる由縁の能力である直撃運命（ストライク・フェイト）。この能力はが言わずもがなである。そしてもう一つの能力は金属粒子の生成とそれの形状操作である。今使用したスキルはこの金属の粒子化が俺を囲むようにして覆う作用がある。このスキルを発動させると、攻撃を食らわそうとする存在に反応して、その進行を阻むべく、金属が凝縮して、見えない金属の壁を作りだす。これの能力は応用も出来、例えばこの金属の粒子を相手の武器に当て、その武器を破壊為る事も可能である。まあ時間が経過為たり、金属の粒子が消費されると、再びスキルを作動させなきゃいけない代物だし、再び作動させるのにも一分間のチャージ時間が必要なる。美味しい話しには裏があるように、都合の良いスキルというわけでもないのである。

「はあアアッ！」

一方向から来る弾丸がラクシュミーのスキルによって阻まれることによって俺は気兼ねなく、残り二方向から来る弾丸の迎撃に集中できる。声を上げながら、俺は迎撃の際に発せられる爆発に巻き込まれないようにうまくよけつつ、モンスター型の弾を切っていく。スキルを発動した方向から聞える、六発の爆発音。そして迎撃に勤しんだ十二発。これで彼女らが放った弾丸は全て撃ち落としたことになるが、再びその三方向から六発づつの発砲音が新たに聞えた。

「おい！」

『大丈夫です。十分耐えられます』

焦った様に問いかけると、彼女は自信ありげに返答を為てくる。

「信じるからな！」

言葉を言い終える頃にはもう三方向よりの銃弾はコチラのパーソナルエリアまで侵入為てきている。俺は意と津一つに目を向けていき、一心不乱に両手の刃で切り漏らしの無いように素早く丁寧打ち落としていく。その甲斐あってかすぐに十発の弾丸は撃ち落とすこと

に成功した。残り二発。油断しないように剣を振るう。
『カルキ、上です！』
　残り一発を切ろうと為た矢先に、突如として相棒からの悲鳴に似た忠告が耳に入る。しかし今その方向に目を向けられない。彼女の指摘から為て隠れていた三体の内の何体かが奇襲を掛けてきたことが窺える。瞬時にその一発を切り落とすと、すぐに顔を上げる。そこには上の枝から降下しながらコチラに銃口を向けた分身の一体が見える。このままだと、あのモンスター型の銃弾の餌食になるな。
「しゃらくせっ！」
　咄嗟の判断もとい悪あがきで左手の短剣を降下為てくる分身に投げつける。その行動を想定為ていなかったのか、分身は空中でもたつきながら、その件を弾いた。その間コチラに目は向けられていない。これはチャンスだな。軽く膝を折って、分身を迎撃しようとジャンプする。物の数秒で剣の届くところまで近づき、分身は驚愕に顔を染めていた。しかしこれで終わりだと思って欲しくないものだ。右手に持っていたラクシュミーを掲げると、彼女はスキル発動の準備を終えていた。
「掲げる刃（ラー・マ）、阻む物無し（ス・ト・ラ）！」
　俺が不愉快になった分だけ、コチラの攻撃に対する防御を無効化し、一撃一撃に相手のＨＰの内０．５のダメージを負わせるスキル。しかし分身にはＨＰは存在せず、このスキルの一撃で霞の様に消え去ってしまった。折角スキルを発動させたのに、これでは不完全燃焼もいいとこだ。目的を終えたため、元の枝に着地して軽く息を吐く。
　そんな時だった。ソニックカイザーが遠方より妙な音を拾ったのは。激しく響かせる気か機械の駆動音。木々が氷見潰されていく破裂音。そして機械的な音声とどこかで聞いた事があるような語尾に『クマ』と発する人物の会話音。あいつ。来てたのか。だが何の目的があってだ？　しかも第七形態で発動していると言うことは、あいつが本気を出さざる終えない敵。又は、機嫌を損ねた奴がこの森にいるのか？　とにかく関わらないように使用。俺も今少し面倒な奴と対面している最中だしな。そんな事を考えていると、その音が徐々に近

づくように大きくなっていった。それはもうソニックザーなんて使わなくても。ふと、対面している彼女に目を向けると、困惑したような顔をして首を傾げている。どうやら彼女はこの音の正体を知らないらしいな。まあ、知ってる人間なんてこのくにじゃあ数人しかいないけどな。様子を伺い続けると、彼女は分身共々構えは解かない物の、明らかに動きを止めた。正体不明の音が何故か近づいてくる。それだけで警戒するのには申し分ない言い訳だ。しかしなんでコチラに近づいてくるんだ。・・・・・・もしかして・・。

俺の考えが当ったかのようにその走行音は突如止み、別の音が耳に入った。それは数発の砲弾を発射した際の起こる空気を破裂させたような音と発射された砲弾により空気を切る音だ。この音を聞いた瞬間俺は嫌な予感がし、急いで地面に降りた。

「ラクシュミー!」

『敵攻阻む隣妻の加護!』

俺の焦った様な声に反応してか、彼女も同じような声でそのスキルを発動させる。幸い前の発動から一分経過していた為、すんなりと発動出来た。しかし、それは間一髪のところで全部展開されたのだ。何故なら、発射された砲弾はもう目の前まで迫っていたのだ。

「くっ!」

雨の様に発光した砲弾群が俺らを含む辺り一面に降り注いだ。俺はスキルがあるから別に痛みを感じることはない。数秒後にはそれは止んだ。しかし辺り一面を見渡すとみっしりと生えていた木々は砲弾の被害を受けて根っこだけ残して、後は残らず爆散して開けた場所になってしまっていた。

「やり過ぎだ。シュウ」

黄昏れるようにそう口にする。言葉が帰ってくる事を期待などしていなかったのだ。

『自分でも思うクマ!』

不意に背後から帰ってこないであろうと思って居た返答が聞える。そう帰ってくるはずのないの言葉がだ。その言葉を耳にして、俺の中で張り詰めていた物が一気に切れ、途方もない疲労感が押し寄せる。

それと同時に彼女に抱いていた感情が急激に馬鹿らしくなってしまった。もうで王にでもなれという思いを共にして疲れた様にその方向に目を向けるとそこには様相通りの人物。この惨状を生み出した本人。【破壊王】シュウ・スターリンの姿があった。